（講演の抄録）

第63回新三木会講演

戦争の記憶

ゾルゲ事件、731部隊、シベリア抑留

加藤哲郎[1]

一橋大学名誉教授
早稲田大学客員教授

2015年10月15日[2]

（於如水会館オリオンルーム）

司会（講師紹介）：本日は加藤先生をお招きしました。先生は、政治学がご専門ですが、最近はインテリジェンス史の分野に特化され、米国の膨大な公文書資料と格闘されています。

日本の15年戦争から戦後の米・ソ冷戦期にかけての諜報、情報戦を追跡される「国際歴史探偵」としてご活躍されています。

今回は1年前のゾルゲ事件講演の第2弾となりますが、ここに御一緒に研究されている山本武利先生を中心とする、インテリジェンス研究会の各位も見えております。

昭和16年のゾルゲと通信士クラウゼンの尋問、裁判の通訳は、元一橋大、ドイツ語の植田敏郎教授、当時は東京外語大助教授でした。

本日は、731部隊の石井隊長の部下で、あえなくハルビン郊外で飛行機の操縦、墜落事故に遭った軍医の御子息もみえており、また、シベリア抑留で病死された父上の遺骨を、5年前にDNA鑑定での確認により、引き取りされたという方も見えております。[2]

それでは加藤先生、よろしくお願いします。

[1] 加藤哲郎（かとう てつろう）氏
1947年生まれ。東京大学法学部卒業、博士（法学）。英国エセックス大学、米国スタンフォード大学・ハー バード大学、ドイツ・ベルリン・フンボルト大学客員研究員、インド・デリー大学、メキシコ大学院大学客員教授等歴任。専門は政治学・比較政治・現代史。早稲田大学大学院政治学研究科客員教授、一橋大学名誉教授。インテリジェンス研究所理事。インターネット上で「ネチズン・カレッジ」主宰。著書に『情報戦の時代』、『日本の社会主義』（岩波書店）、『ゾルゲ事件―覆された神話』（平凡社新書）』など多数。
詳細は講演参考資料（以下「資料」という）参照。

[2] 10月15日に行われたこの講演の内容を新三木会の「抄録」として収録したが、正確を期すよう記録するとともにできるだけ臨場感を残すように努めたため、やや「詳録」に近いものとなっている。小見出しと脚注は「資料」を参考に記録者が適宜付した。

講師（加藤哲郎 早稲田大学客員教授、一橋大学名誉教授）： 去年の1月、山本先生と一緒にここでお話しました時は、ゾルゲ事件の話をさせて頂きました。 平凡社新書の『ゾルゲ事件』を書いていた時期でしたので、その時はゾルゲ事件に集中した話になりました。

今日は、その後の研究を、731部隊やシベリア抑留の問題と結びつけてというか、そっちの方が主題になりますが、お話するということでやらせて頂きます。

実は、さっき懐かしい教え子が来てくれたのですが、5年前まで一橋大学で、30年間政治学を教えてきました。そのときはこういう話は、一切したことはありません。大体アメリカ政治学を中心とした、権力とは何か、政治とは何かという理論的問題を、一橋は政治学者が少ないものですから、そういう講義をしていたのです。

その後、早稲田の方に移らせて頂いて、そちらではむしろ、こうしたインテリジェンスに関係するようなことも、大学院ですので、研究し講義でもできるようになり、時々この種の話をしています。

1 ゾルゲ事件と731細菌戦部隊

今日は「戦争の記憶―ゾルゲ事件・731部隊・シベリア抑留―」ということで話させて頂きます。

「資料」の1枚目、一番下のところに「本日講演の要旨」と書いてあることが、今日話す中身ということになります。つまり≪歴史の記憶は、諸個人の体験・証言とともに、時々の情報戦で作られる。例えば敗戦直後に反戦・反ファシズムの物語とされていたゾルゲ事件は、東西冷戦の開始とともに「国際赤色スパイ団」の犯罪とされた。冷戦終焉で現れた、旧ソ連の秘密文書やアメリカの国立公文書館資料で調べていくと、一見無関係なゾルゲ事件と関東軍731部隊の細菌戦・人体実験、さらには日本人60万人のシベリア抑留、あるいは1956年日ソ国交回復時の近衛文麿元首相長男・近衛文隆の抑留死に至るまで、虚実を取り混ぜた、（これが重要なのですけれども、いろんな噂とか分からないことがあるのですが）、日本・アメリカ・ロシア（旧ソ連）、あるいは中国等々からによる国際情報戦が見えてくる≫というのが、今日の話の主題です。

ユネスコ歴史遺産をめぐる情報戦

〔スライドの写真を指し示して〕 この写真、「DO YOU KNOW?」というこの写真は、2013年5月12日、2年半ほど前のものです。東日本大震災で、松島空港が津波で完全に壊されて、自衛隊の飛行機も九州に退避していたのですけれど、それがようやく松島空港の復興がなって、ブルーインパルスと

いう自衛隊のアクロバット航空隊が松島に戻ったときに、安倍首相がその基地で自衛隊を励まして、その際に（ちょっと見えませんがパイロット服を着て）親指を立てて復興を祝っている写真です。

これは、日本の新聞ではそのように書かれていますし、なんでもないことなのですけれども、これについて、すぐにアメリカの記者がかみつきました。 何かと言うと、実は安倍首相ではないのです。ポイントは、その下の飛行機のナンバー、要するに、「731」という飛行機に乗って、こうやって〔指でVの字を示して〕ニコッとしているというのは、「これは一体何事だ」というのです。

何故かというと、第2世界大戦で「マルタ」という言葉で呼ばれたのですけれども、日本軍に敵対していると思われる中国人・ロシア人・朝鮮人、あるいはモンゴル人等々を平房というのですけれども、ハルピン郊外の大きな実験工場に連れ込んで、そこで人体実験を行い、さらにそこで培養されたペスト菌、コレラ菌等々の爆弾を、実際に中国大陸でばら撒いた。それが、いわゆる「731部隊」で、「その731部隊を連想させるような機体番号の自衛隊機に日本の首相が乗っているとは何たることだ」というのです。 アメリカのネルソン・レポートによりますと、これは、丁度ドイツの首相がふざけてナチス親衛隊（SS）の制服を着て登場するようなものであって、人々に、とくにその被害を受けた国の人々に大きな心の痛みを与えるものである。こういう論評が出ました。そのことを、中央日報（韓国の新聞）が引用して、日本語でWEBに報じたものです。「日本のメディアはこのことについて報じていない」ということも問題にしています。

ここ数日の新聞で、ユネスコの世界記憶遺産に中国の提出した南京事件が認められて、日本政府は「ユネスコの分担金を出さない」とまで言っているようです。あれはメモリー・オブ・ザ・ワールド、つまり「世界の記憶」というシリーズで、記憶遺産と呼ばれるものなのですが、別にその犠牲者が30万人か、2万人かという人数を問題にするのではありません。当時書かれた被害者の日記とか証言とか、そういうものが記憶遺産としてまとめられたものです。

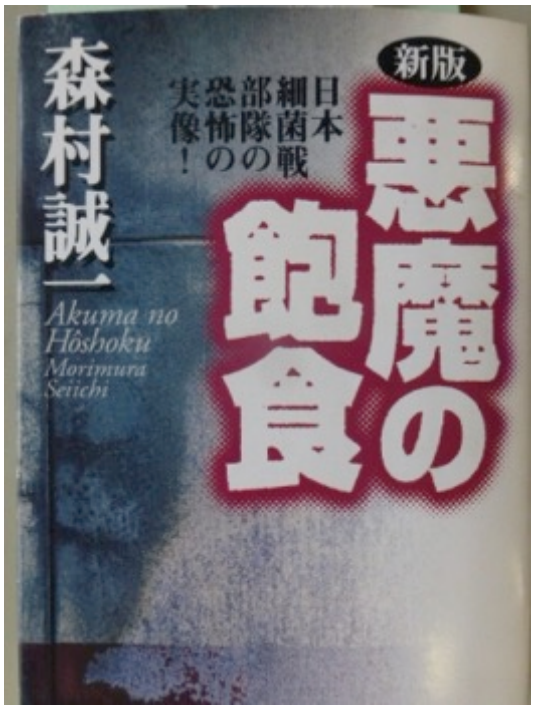
日本では、例の三池炭鉱のスケッチ画なんかも、ユネスコ記憶遺産に指定されたものです。それに対して、日本政府は、南京での被害者の数をとくに問題にして、「政治的利用だ」と言っているのですけれども、ユネスコ世界遺産に認定された、明治日本の産業革命遺産に首相の出身地山口の松下村塾まで入れられたというのも、ある意味で政治的です。

中国側からは、731部隊の跡地が、ユネスコ世界遺産として申請されており、登録される可能性がある。

第1が今回の南京事件ですけれども、おそらく次は、従軍慰安婦問題でしょう。従軍

慰安婦問題は、日本と韓国の間で主として問題になっていますけれども、最近中国では、中国大陸においても日本軍は、 慰安所を作って中国人女性を虐げていたという記録や証言が、いっぱい見つかっております。それを、場合によっては韓国と共同で、ユネスコ記憶遺産に申請してくる可能性があるわけです。

そして、3番目にやって来る歴史遺産が、この731部隊の問題です。731部隊の問題は、1981年に出た森村誠一の『悪魔の飽食』という本で知られるようになり、ベストセラーになりましたね。それ以来、いろいろな研究が進んでいます。



「歴史の記憶」と明らかになってきた資料

大体冷戦崩壊までの記録というのは、アメリカ軍が731部隊の関係者、とくに医学者・医師たちからデータをとって、それによって極東軍事裁判の免責、つまりデータを提供したから、その代わりに訴追しない形にした話が、アメリカ側の記録から出てきた。

それに対して、ソ連の側は「いや、あれは明白な戦争犯罪だ」ということで、1949年の12月ですけれども、シベリアのハバロフスク裁判がありまして、シベリアに抑留した60万人の日本人の中から731部隊の関係者、とくに確証のある12人の被告を選び出し、その人たちに戦争犯罪として、当時の日本軍が、ジュネーブ協定で禁止されていた生物化学兵器、毒ガスと共に禁止されていた細菌戦を告発する。しかも人体実験を行ったということで、ソ連独自の裁判を進め、12人が有罪になって、山田乙三関東軍総司令官以下被告達に大体禁固（矯正労働）10年から25年ぐらいの罪が着せられました。

ソ連側から731部隊の裁判記録が出されて、その時期にそれをもとにした山田清三郎さんの小説とか高杉晋吾さんのルポルタージュとかが出た。いわば米ソの資料に基づいて、731部隊についての情報戦がなされてきました。

とくにアメリカ側は、ハバロフスク裁判について、「ソ連の裁判はでっち上げで、信用できない」と、黙殺する態度をとりましたので、両方の主張が並行していました。

しかし、研究が本当に進んできたのは、つい最近といいますか、冷戦崩壊から2000年代に入ってからであります。これは、もともと最大の被害者である中国の人たちが、証言や物的証拠を集めるようになり、それに基づいて日本に対する国家賠償請求の裁判まで起こしました。つまり、米ソが、731を利用しようと争い合っていた段階から、本来の被害者といいますか、中国の人達が声を出し始めたために、全く新しい731部

隊研究の局面が生まれている。私のゾルゲ事件研究も、「冷戦時代と今は違うのだよ」と配布「資料」の冒頭に書いているのですが、731についても、関係する新事実がいっぱい明らかになっているのです。このことを中心に、それに関連したいろいろな問題を、エピソードを交えてお話しします。

多摩墓地のゾルゲの墓と731供養塔

これはゾルゲ事件研究と731研究が偶然に結びついた話ですが、ゾルゲ・尾崎秀実が死刑に処されたのは1944年11月7日で、毎年11月7日には、ロシア大使館の関係者を含めて墓前祭が行われています。

〔スライドの写真を示して〕これは去年の墓前祭の際に撮った写真です。実はゾルゲ・尾崎達のお墓のそばに、「懇心平等万霊供養塔」と多摩墓地の記録には書いてあるのですが、表には何も書いていない、こういう墓標があるのです。これが実は、731部隊の隊員および犠牲者供養塔で、多摩墓地の記録には英語で Unit 731 Memorial と書いてあります。

これが何故か、わりと近くにあるのです。この2つのお墓、ゾルゲの墓とこの懇心平等万霊供養塔はどういうふうにしてできたかを調べていきますと、「ふたきひでお」と読むのですが、「二木秀雄」という731の元隊員がでてきます。731部隊の供養塔は、医師の二木秀雄が私財を投じて、1956年に146万円ですから相当の額ですけれど、それに有志がさらに5万円出して作ったメモリアルなのです。本人の墓も近くにある。この二木秀雄という人物は何者かを調べていくと、今日の話になるのです。

きっかけは、最近占領期のカストリ雑誌に興味があって、いろいろ集めています。『眞相』とか『政界ジープ』とか『レポート』、『旋風』などいろいろあるのですが、その一つである『政界ジープ』という雑誌が、「尾崎・ゾルゲ赤色スパイ事件の眞相」というのを、1948年10月号で特集しました。

今の我々は、「あれはスパイ事件だ」と知っていますから、何でもないことですけれど

も、実は、尾崎秀実・ゾルゲが、太平洋戦争が始まる直前にやった行動を「スパイ事件」とか「赤色スパイ事件」と呼んだのは、これが初めてのものなのです。

しかし、ゾルゲ事件はその前から知られていたのではないかと思われるかもしれません。それは、尾崎秀実の『愛情は降る星の如く』という獄中で書いた家族への手紙が、戦後ベストセラーになって、尾崎とゾルゲは、それまで「反ファシズム・反戦平和の闘士、戦争が始まる直前まで日本で戦争に反対する人がいた」というふうに、むしろ戦後の民主化の時期には高く評価されていたのです。「尾崎こそが、真の愛国者だった」、こういう論調が、実は48年秋にこの『政界ジープ』が出るまでは、日本での支配的評価なのです。事実、占領期の出版物を網羅したプランゲ文庫で調べても、「スパイ事件」と名付けて描かれたものは、この雑誌が出るまでありませんでした。

この3ヶ月後、49年2月に、アメリカ陸軍省のゾルゲ事件についての報告書が出ます。これが「ウィロビー報告」と呼ばれるものです。

当時のGHQ-G2（諜報部）のウィロビー将軍が作った公式記録で、これがレッド・スパイリンク、つまり「赤色スパイ団」の告発になっていまして、それで「ゾルゲ事件というのはスパイ事件だったのだ」ということで、日本でも広く知られるようになるわけです。

『政界ジープ』は、その3ヶ月前に出て、当時は目立たなかったのですが、ウィロビー報告が出ることによって、「ああ、そうだったのか」となった、いわば、先駆けのスクープ記事だったのです。

ゾルゲの墓を建てた石井花子の証言

この記事をリヒャルト・ゾルゲの東京時代の愛人と言われる石井花子という女性、銀座のバーの女給だった女性ですけれども、彼

女が、ゾルゲの墓を建てるきっかけになったと証言しています。

昭和23(1948)年の10月頃に『政界ジープ』という雑誌に「尾崎ゾルゲ赤色スパイ事件の眞相」という記事が出たので、びっくりして、それまではいろいろゾルゲ事件について調べ、とくにゾルゲの骨が、遺骨がどうなったかを知ろうと思ったけれど、知ることができなかった。それが、この記事の中に、ゾルゲの遺体が雑司ヶ谷の共同墓地にあると書いてあったので、雑司ヶ谷に通って、守衛さんと仲良くなって、ようやくその土葬された体格のいい外国人の遺骨が出てきたので、これがゾルゲの骨だということが分かった…。

〔スライドの写真を示して〕この墓ですね。多磨墓地のリヒャルト・ゾルゲの墓というのは、石井花子が建てた墓です。

つまり、ゾルゲの遺骨がどこにあるかわかり、墓をたてるきっかけになったのが、この『政界ジープ』の記事だったと述べているのです。

日本でのゾルゲ事件の報道・見方は、そこで大きく変わるわけで、今日までアメリカの陸軍省報告、ウィロビー報告の「赤色スパイ事件」が、支配的な見方になったのです。けれどもそれは、史実に照らしてどれだけ本当なのだろうかと、いろいろ検討したのが、『ゾルゲ事件――覆された神話』という、私の平凡社新書です。

冷戦後に明らかになったゾルゲ事件

ゾルゲ事件については、とくに冷戦が終わってから、ソ連側とアメリカ側から新しい資料が膨大に出てきました。それを見ていくといろいろほかのことも分かってくる。

GHQ・G2のウィロビー報告は、『上海における陰謀』という書物の原タイトルの通り、もともと日本よりも、中国が本来の対象だったものです。ソ連は、1964年に初めて「ソルゲは、実は、我が国の赤軍の諜報員であった」と認め、しかも一足飛びに英雄にしました。冷戦の時期、キューバ危機のすぐあとで「ゾルゲみたいな諜報活動が今こそ必要だ」というモデルに仕立て上げる。それまでは、リ

ヒャルト・ゾルゲの存在そのものを、ソ連政府は否定していたのです。

だから、1964年までは、アメリカが一方的にゾルゲ情報を流し、「ソ連は、日本政府の中枢にスパイを送りこんだ。そうしたスパイは、恐らくアメリカにも、あるいは、当時の世界中どこにでもいただろう」という、情報宣伝をやっていた時代だったわけです。

731の記念塔をたてた二木秀雄

このつながりでは、『政界ジープ』の二木秀雄、731供養塔を建てた人物が重要です。ゾルゲの墓は石井花子ですけれども、731の方の記念塔を建てた人物は、731部隊の隠蔽・免責・復権について、重要な役割を果たしたことが、分かってきました。

端的に言えば、初めは731部隊の存在を抹消し隠蔽する。つまり、一切何もなかったように証拠を隠滅するための作業、平房の実験棟の爆破や人体実験用「マルタ」の殺害、資料の焼却などの第一線にいました。731部隊員は、1945年8月9日にソ連軍が満州に攻め込んだときに、すぐに特別列車を仕立て、日本に帰国しました。8・15（終戦の日）以前に、既に満州を離れていたわけです。名簿と貴重データ・資材は持ち帰られました。

その幹部たちが、1945年8−9月、どこに集まったかというと、石川県の金沢です。実はこの金沢が、石井四郎に縁があり、二木秀雄の出身地です。そこに仮本部が置かれて、隠蔽・口止め工作がなされていたのです。二木は731部隊の名簿管理人です。

その後45年10月ぐらいから、アメリカ軍は、日本は戦時中に細菌戦をやっていたらしいと分かって、その関係者を尋問し始める。そこから第二段階の免責工作が始まります。つまり、マルタを使った人体実験をやったこと、ペスト蚤を実際に撒いて細菌戦を実行したこと、この2つのこと以外は、米軍にむしろ積極的に供述して、俺達は純粋な科学研究、すごい医学研究をやったのだといえ、という指令が石井四郎少将から出される。そして、731部隊と米軍細菌戦調査団の折衝が行われる。この過程にも、この二木秀雄という人物が関わっている。

それから、1947年の末に極東軍事裁判で、もう731部隊は戦犯にしないと決まる。つまり、データを提供したから不訴追・免責にすると決まった段階以降は、今度は医学界の中で、731に関係した医者達が、国立大学医学部長とか日本学術会議会員とか、どんどん偉くなって復権していく過程があるわけです。そこでもこの二木という男が一役買って、関係している。

しかし、1956年に、『政界ジープ』という、この雑誌の編集者、編集長・社主であった二木秀雄が、戦後最大の恐喝事件、7000万円ほどを不当に得た「政界ジープ事件」を起こす。大会社に「お前の会社のスキャンダルを雑誌に出すぞ」といって金をとるという、後の総会屋のやり方です。これをこの雑誌がやっていたということで捕まり、二木も

主犯として、最終的には懲役3年ですが、有罪になって表舞台から消えていく。

しかし、その間に731部隊の関係者は、医学界・医師会、厚生省その他で復権していくプロセスがあったわけです。その関係は詳しく言うといろいろ面白いのですが、これは3月に早稲田の方で一度講演していますので、今日はごく簡単にします。

マックス・クラウゼンの尋問記録

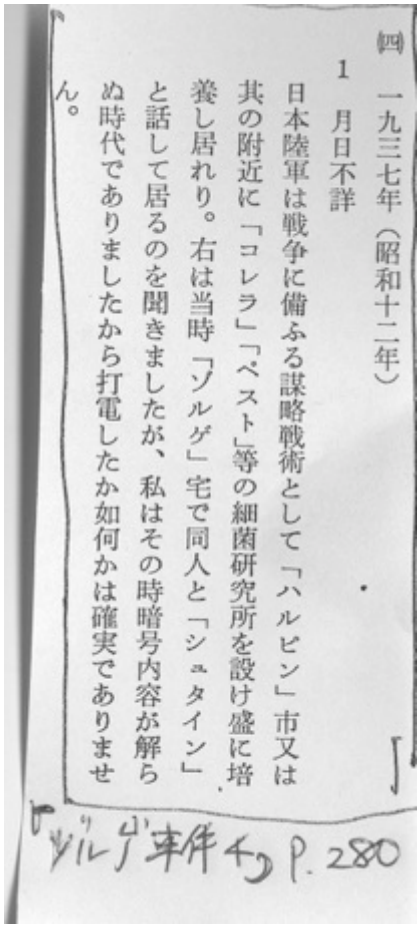
そういうことが分かってきたので、ゾルゲ事件と731部隊がどこかでつながるのではないかと考えて出てきたのが、この裁判記録です。

マックス・クラウゼンという、ゾルゲのグループの無線技士が、つかまって1942年に尋問された記録の中に、証拠がありました。これは、みすゞ書房の『現代史資料　ゾルゲ事件』という資料集の第4巻の280頁に、収録されています。

《日本陸軍は戦争に備える謀略戦術として、ハルピン市またはその付近にコレラ・ペスト等の細菌研究所を設け、盛んに培養し、居れり。右は当時ゾルゲ宅で、同人とシュタインと話しているのを聞きましたが、私（クラウゼン）はその時暗号内容が解らぬ時代でありましたから、打電したか如何かは確実でありません。》

これは、1937年の何月何日かは分からない話です。こういうのが出てきた。実はゾルゲ事件研究は、戦後すぐから長い伝統があり、もう50年以上経っていますけれど、これはゾルゲ事件研究の人たちが見逃していた記録なのです。

731部隊を長く研究している近藤昭二さんというテレビディレクター、ルポルタージュをいっぱい書いた人ですけれども、彼が実は、ゾルゲ事件の記録の中に何か731に関係あるものはないかと探して、ようやく見つけたものです。私は半年前に近藤さんから直接教わったのですが、こういう文書記録があった。ロバート・ワイマント『ゾルゲ・引裂かれたスパイ』（新潮社）にも簡単ですが言及されています（159頁）。


(四)　一九三七年（昭和十二年）
1　月日不詳
日本陸軍は戦争に備ふる謀略戦術として「ハルピン」市又は其の附近に「コレラ」「ペスト」等の細菌研究所を設け盛に培養し居れり。右は当時「ゾルゲ」宅で同人と「シュタイン」と話して居るのを聞きましたが、私はその時暗号内容が解らぬ時代でありましたから打電したか如何かは確実でありません。
ゾルゲ事件 P.280

つまり、ゾルゲは1937年に、731部隊という名前もまだ付いてない（731と付けたのは1941年以降です）、加茂部隊とか東郷部隊とか呼ばれていた段階で、すでにこの情報を持っていた。いわゆる平房、731部

隊の本拠地が構築されるのは1938年以降です。その前に、すでに知っていた。

石井部隊が給水で活躍するノモンハン事件は、1939年です。その2年前ということになります。恐らく外国に日本の細菌戦が知られたものとしては、最も早い情報になります。ちなみにアメリカ軍は、1941年に太平洋戦争が始まってから「どうも日本は細菌戦をやろうとしている」という情報をつかんで、戦後になって初めて本格的に731部隊の調査を始めます。

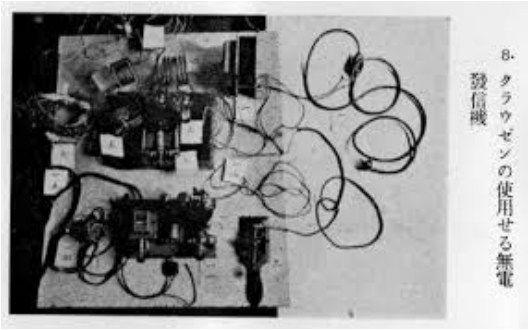
ゾルゲの得た細菌戦情報の情報源

そうすると、この情報は、戦後にソ連がシベリア抑留者の中から731部隊の関係者を戦犯としてピックアップする戦犯捜査、あるいはハバロフスク細菌戦裁判でも使われたのではないかと思って調べ始めたのですが、実際に使われた証拠はありません。

旧ソ連がなくなって、ロシアから今、ゾルゲが日本からモスクワに送った電報が約200通出てきた。全部で400通ぐらいと言われていますけれども、その中の200通が既に公表されていますが、その中には入っていません。これからひょっとしたら出てくるかも知れませんけれども、731情報がモスクワまで送られてスターリンがそれを読んだかどうかは、まだ分からない段階です。

それにしても、こういう会話があったということは事実です。そうすると、どうしてそんな情報をゾルゲは得たのか。それからなぜ日本軍ないし特高警察は、それを無視したのだろうかと、こういう話になるわけです。

ゾルゲの話し相手のギュンター・シュタインは、イギリスの新聞記者で、Economistなどの特派員、1938年には日本から離れています。そのためゾルゲ事件では捕まっていません。したがって、日本の特高警察や憲兵隊が調べようと思っても、もう手の届くところにいないから、調べても無駄だということで、この証言だけで終わったという可能性があります。



8. クラウゼンの使用せる無電發信機

それにしても、この情報はどこから来たのか。その情報源の問題が、ゾルゲ事件の新しい謎の一つになります。

ゾルゲは一体どこからこういう軍事情報を得ていたのかといいますと、一つは仲間の外国人特派員、シュタインたちです。けれども、その他の可能性もあります。彼はドイツ大使館の顧問、駐日ドイツ大使オットの助言者でした。日本の731部隊の関係者も、石井四郎以下ドイツ留学経験者が多い。ドイツとの同盟関係が非常に強い。戦争前から、ナチスドイツは細菌戦の研究をやっていたので、ドイツ大使館から取った情報という可能性もある。

それから日本陸軍の関係者も、実はゾルゲを信頼していまして、武藤章、馬奈木敬信、山縣有光らいわゆる親独派の将校たちは、ゾルゲがドイツ大使館の顧問ということから、進んでドイツの軍事情報と日本の情報のやりとりをしていましたから、「日本軍も、

細菌戦をやっているよ」というようことをゾルゲに囁いたかもしれない。

中国大陸の中国共産党の情報の可能性もある。ゾルゲは日本に赴任する前に1930年から32年の末までは上海で活動し、周恩来らとも連絡していましたので、中国筋から情報を得たかもしれない。

それから、尾崎秀実はもともと朝日新聞上海特派員から満鉄の有力な調査員でした。しかも近衛内閣のブレーンで、朝飯会のメンバーでしたので、そちらのルートかもしれない。

つまり、いろんな可能性があるのですけれども、私はこれは、京都大学医学部から出たのではないかというふうに考えまして、その筋を今追っ掛けています。

なぜ京都大学かといいますと、731部隊の医師、石井四郎以下有力幹部は、京都大学医学部卒が何故か多いのです。もっと正確に言いますと、旧制四高、金沢ですけれども、旧制四高の理科から京大医学部というルートが、実は石井四郎以下731部隊の有力な幹部の供給源でした。石井四郎が京大学長の娘と結婚し、731部隊の部下たちを育てていた時代に、京都大学医学部にいた医学生のなかに、安田徳太郎という、ゾルゲ事件の被告がいるのです。

安田徳太郎ルート？

安田徳太郎は、731部隊に関係したわけではなくて、山本宣治という、京都で河上肇なんかと一緒になって共産党系の運動とか無産者診療所という貧しい人のための医療をやっていた人の従弟でした。

それで、宮城與徳というゾルゲ事件の被告の1人から頼まれて、安田徳太郎自身がゾルゲ諜報団に情報を流していたことは、これは裁判記録にもあるわけです。

その安田徳太郎が、京大の医学部の同窓会の一員です。ちょうど彼が卒業した1924年の2年前に石井四郎が卒業し、それから731部隊の中心になっている医者達は、大体昭和5年、1930年前後の京大医学部の卒業生です。つまり、先輩と後輩の両方に731関係者がいっぱいいるという関係なのです。

京大医学部卒も、別に全員が悪い人ではありません。むしろ京都で活動し右翼に暗殺された山本宣治の伝統を汲んで、京大医学部が戦争協力するのを遺憾に思った医師もいますから、そういう人たちから、安田に情報が流れたのではないか。

あるいは、安田徳太郎は優れた医者だったために、その頃、1937年頃は東京の青山に診療所を持っています。青山ですので、市ヶ谷に近く、軍の関係者も来るわけです。陸軍の将校なんかが、病院で診療を受けながら「俺は実は満洲に行ってこんなことをやってきた」なんていう話をする可能性もある。こういう問題から追いかけていくと、この安田徳太郎ルートというのが、ゾルゲの報告中に731部隊が入った情報源になる可能性が見えてきました。

ただし、この731情報が本当にモスクワに届いて、実際にソ連に役に立ったかどうかは、まだ全く分かっていない。こういう謎が、ゾルゲ事件にしろ、731にしろ、いっぱいあります。今日はそれをいくつか並べることで、むしろそれらが繋がってくる可能性を探ってみるという、謎解きの話になります。

2　731部隊と二木秀雄

関東軍防疫給水部

731部隊のことは御存じの方も多いと思いますけれども、関東軍防疫給水部といいまして、 1937年頃は、まだ731とは名付けられていません。ハルビン郊外の平房に6キロ四方といいますから、大変に巨大な軍事実験棟をつくりました。そこに抗日運動をやった中国人、ロシア人の捕虜を「マルタ」として連れてきて、伝染病の研究という名目で、生体実験をします。一番ひどいので有名なのは凍傷実験ですが、日本軍の兵士の被害を少なくするために役立てるとして「零下40度ではどうなる、零下30度だとどうなる」と、屋内外で実験し殺していった。

もう一つの研究が、ペストとかコレラとか炭疽菌とかを、蚤とネズミを使って培養しました。それを陶器の筒に入れた爆弾にして、実際に1941年から42年にかけて、中国大陸の寧波とか浙江省とかでばらまいた。そういう記録が、冷戦崩壊以降中国側からいっぱい出てきて、今では731博物館がハルビン郊外にできるまでになっています。

その実態は、陸軍の中でも、トップクラスでしか知られていない。昭和天皇が知っていたかどうかについては諸説があるのですけれども、岩波ブックレットで、中央大学の吉見義明教授が証明したところによると、細菌戦については軍の記録にも載っていて、おそらく参謀本部および統帥権を持つ天皇も知っていたであろうと、日本側資料でも出てきている。

データを提供した医者たちとその後

しかしながら、石井中将らは、極東国際軍事裁判では訴追されませんでした。人体実験のデータ、細菌基礎研究のデータを全

部米軍に提供することによって、いわば司法取引で免訴になる。

しかも、そのデータは、これは証明するのは大変なのですけれども、朝鮮戦争、ベトナム戦争の枯葉剤、そしてひょっとしたら今でもイラクや中東で使われている生物化学兵器のもとになったのではないかと言われています。

そのために、そのデータを提供した医師たち、石井四郎は戦後隠遁するのですけれど、彼以外の医者たちは、日本の医学界で偉くなっていく。その一端が表に出たのは、1980年代の薬害エイズ事件です。ミドリ十字という会社に、旧日本軍の731関係者が集まっていて、そこで血漿剤が作られていた。それが731の研究を基にしたものであると分かってくる。

石井四郎は、ノモンハン事件の年、つまり1939年に、防疫給水部の防疫というよりも給水、つまり川の汚い水をろ過してきれいな飲み水にするという、その仕組みをつくったということで表彰されます。〔スライドの写真を指し〕これ感状ですね。天皇からの感状なのです。

当時の東京大学と同じ規模の予算が、満州の平房731部隊に与えられ、約3000人の医者および技師・技術者、それから少年兵も勤めていた大きな工房がつくられます。

中国側の告発と細菌戦裁判

中国側の試算では、この731部隊による犠牲者が約3万人、と今のところなっている。南京大虐殺と同じように、正確な数は分かりません。先ほど言ったように、731部隊の被害の全容は、最大の被害者である中国側の告発で、最近明らかになったきたのです。

1999年、つまり20世紀の終わりに、中国の細菌戦被害者および家族が、日本で731部隊細菌戦国家賠償請求訴訟を起こし、2002年東京地裁判決では、細菌兵器が実際に使われ約1万人が被害を受けたこと、それがハーグ陸戦条約違反であったことは、判決でも認められました。

ただし、従軍慰安婦問題とおなじで、それを国家賠償するかどうかについては、これは認められない。つまり中国との平和条約のときに決着している、と。ちょうど日韓条約によって、従軍慰安婦問題もすでに国家間の関係としては解決をしている。それと同じだとなっているのです。

日本政府の方は、判決ではここまで出ましたけれども、これまで細菌戦をやったという事実そのものを認めていません。しかし、アメリカやロシア、中国からは、どんどん資料が出てきているのが、今日の状況です。

731結核班長二木秀雄という人物

その中の、先ほど言った二木秀雄という人物ですけれども、731部隊で石井四郎の側近で、青年将校でした。

1908年生まれですので、石井四郎より15歳ぐらい下ですけれど、当時30代の医師で、中堅幹部・青年将校といっていい。実際の人体実験とか、細菌戦をやったのは、ほとんどがこの世代、1910年前後の生まれの人たちです。そればかりではなくて、彼は、四高から金沢医大卒業で、その金沢医大の先生が谷友次という、京大に行った石井四郎の四高での同級生です。つまり、自分の先生が石井四郎の同級生で、その先生のもとで医学博士になり、石井四郎の部隊に派遣されたという関係で、731部隊総務部企画課長でした。

731部隊は、約3000人の膨大な組織ですけれど、総務部企画課というのは、関東軍の参謀本部と作戦を調整する部署です。軍人と非常に近い関係にあったのです。

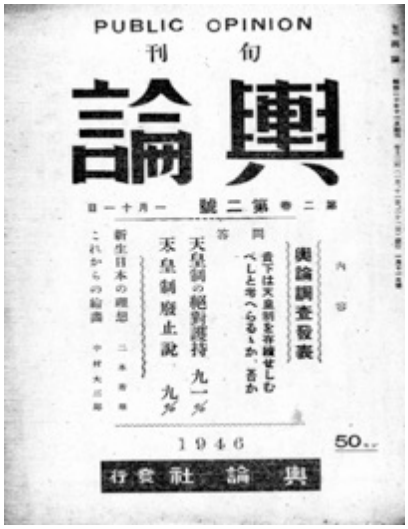
それから彼は、第一部結核班長になっています。正確に言うと、結核および梅毒の基礎研究担当班長。 彼の金沢医大での卒業論文は、梅毒スピロヘータについての研究でした。

これがなぜ重要かというと、戦地において日本軍の兵士たちが性病にかかる率が非常に高かった。ですからそれに対する防止策が、軍にとっては切実でした。実はその生体実験に、いわゆる慰安婦達が使われていました。これは、731研究の方で出されている慰安婦問題です。つまり結核および梅毒での生体実験をやった張本人です。

金沢仮司令部の設営と雑誌『輿論』

ところが二木は、敗戦後すぐに日本に戻ってきて、自分の故郷金沢で、石井四郎からの命令を731部隊の部下たちに届ける仮本部の設営担当、連絡参謀になります。

その後、1946年夏に『政界ジープ』という雑誌を作るのですけれど、その前に彼は、731部隊の証拠隠滅をはかりながら、同時に1945年11月から金沢で『輿論』という雑誌を出していたのです。


PUBLIC OPINION
旬刊
輿論
第二卷 第二號 一月十一日
内容
輿論調査發表
問 陛下は天皇制を存續せしむべしと考へらるゝか、否か
答 天皇制の絶對護持 九一%
天皇制廢止說 九%
新生日本の理想 二木秀雄
これからの給與 中村大三郎
1946
50..
輿論社發行

これは話せば長くなるのですが、当時パブリックオピニオンを掲げるというのは、民主化の象徴です。「民主主義とは輿論に基づく政治である」と巻頭言に書かれている。何をやろうとしたかというと、「天皇をどうするかについては輿論と国民投票によって決めるべきだ。これがアメリカ型の民主主義だ」という主張を、1945年の11月、敗戦の3ヶ月後に、すでに雑誌に出しています。

「原子爆弾を見て天皇陛下の御聖断があったので、ようやく日本は戦争をやめることができた。したがって、天皇陛下は終戦に重要な役割を果たしたのであって、戦争犯罪とは関係がない」、「だから天皇制は守るべきである」というのが『輿論』の主張です。

もう一つは、「日本が負けた原因は、原子爆弾である」、「それは科学技術が日本は遅れていたからだ」と、彼は医学博士でもあるが、「医者および科学者は、今こそアメリカ

の科学技術を学んで、それで新しい新生日本をつくる、科学技術立国、文化立国として再生しなければならない」と主張します。

『政界ジープ』、『輿論』、『医学のとびら』

こういう主張を、すでに45年の11月、日本で世論調査が始まる最初の頃に出しているのです。ある程度売れたのか、翌年1946年8月に東京に出て始めたのが『政界ジープ』という時局雑誌でした。公称10万部、実際は5万部ほどで、10年間続きます。

当時、もう一つ似たような、やっぱり10年間続いて大体5万部から10万部売れていた雑誌に『眞相』がありました。これは左派のスキャンダル雑誌です。

これに対抗して、『政界ジープ』は、右派のスキャンダル雑誌としてGHQの意向を宣伝する、それを731部隊関係者が作っていたという関係です。

今で言えば、週刊現代と週刊新潮の違いくらいと言ったらいいでしょうか。どちらも嘘や噂を交えたいろんなゴシップ報道をやっているわけですが、普通の新聞とか中央公論とか文藝春秋には出てこないようなことが出て来るという意味で、便利な雑誌です。嘘や噂がいろいろあるが、中には真実が含まれている、貴重情報もあるという、そういうものです。

そこに目をつけて、つまり、知識人とか学者がいっていることよりも、「これからは、庶民の輿論が大切だ」、「輿論を作るにはこういう報道が必要だ」と始めたのが、この二木という男の、機を見るに敏なところです。

そればかりではありません。彼は『輿論』と『政界ジープ』のほかに、『医学のとびら』という雑誌を出します。

この『医学のとびら』(初期は『とびら』)と言う雑誌は、厚生省医務局監修・二木秀雄編集・発行となっています。要するに、公称10万部の時局雑誌『政界ジープ』で儲けたお金で、医師・医学生向けの雑誌を作って、731部隊の関係者、後の金沢大学医学部長石川太刀雄丸とか、東京大学の緒方富雄とか、そういう人たちの論文を載せて、医学会の中にも彼は食い込んでいく。

その雑誌『医学のとびら』の後ろの方は、ほとんどが薬品会社と医療機器会社の広告

です。あとは銀行・保険会社などです。要するに、医薬業界に取り入ってお金を儲け、それで731部隊の供養塔や731の幹部同窓会「精魂会」をつくったのです。

ついでにいえば、1949年に、厚生省・文部省・労働省・日教組後援、「若き人々におくる性生活展」というのを、二木秀雄が主宰し、浅草の松屋で開いております。「これは真面目な、若い人に対する性教育の場だ」と謳っていますが、その目玉に「高橋お伝」の展示があります。明治時代の女性犯罪者の局部標本を展示するというのが売りです。これが大いに受けて、しかも何故か文部省と日教組の両方が後援している〔笑〕。厚生省は勿論なのですが…。そういうことをやって官界政界にも食い入るという、時代の流れに敏感な、調子のいい男でした。

しかもジープ社からは、それまでは単行本はほとんど出していなかったのですけれど、朝鮮戦争の始まる1950年に突然、なぜか400冊も出しています。相当の元手が必要だったはずです。その中には、『アメリカ留学ノート』など米軍御用達のものと、『私は、毛沢東の女秘書でした』などという、いわゆる反共ものがあります。そういう出版社の社長が、二木秀雄なのです。

「日本ブラッドバンク」の設立

しかも、重要なのは、朝鮮戦争前夜、1950年に、内藤良一と共に血液銀行を作ることです。

内藤良一という731関係者がいます。彼は京大医学部の石井四郎の後輩で、東京の陸軍軍医学校の防疫研究の責任者でした。アメリカに留学して英語がペラペラだったものですから、米軍と731部隊の間を、通訳兼免責交渉役としてつないだ男です。

同時に内藤良一は、バックに有末精三、服部卓四郎ら旧陸軍参謀本部にいながら、戦後すぐに今度は米軍GHQ・G2（諜報部）のウィロビー将軍によって重用された諜報関係の人達とつながっていました。彼らと一緒になって、内藤良一は、米軍との取引、つまり「データをやるから極東軍事裁判にかけるな」という交渉を成し遂げるのです。

二木秀雄は、その内藤良一、および731部隊に医療・実験機器を納めていた日本特珠工業社長の宮本光一と3人で、「日本ブラッドバンク」という会社を作り、取締役になる。1950年は朝鮮戦争勃発で、日本にいたアメリ軍兵士がどんどん朝鮮にいく。怪我をして帰ってきた時に、輸血しなくてはいけない。その輸血剤を提供するのが、この日本ブラッドバンク、血液銀行の役割です。この会社に731部隊の残党を10人近く組み込み、朝鮮戦争で大儲けし、それが1964年にはミドリ十字という名前になって、80年代に薬害エイズを引き起こす。こういう関係になっている。二木秀雄は、この日本ブランドバックの設立者で取締役でした。

先ほど言いましたけれども、その後1956年に、「政界ジープ事件」という、総会屋風恐喝事件を起こしました。それで捕まって起訴され、転落する。1969年に懲役3年が最高裁で確定します。

日本イスラム教団の設立

しかし、それで町医者に戻っても、どっこい懲りないのが、この男の731魂です。1974年末になると、新宿の歌舞伎町にロイヤルクリニックという、新宿区役所の筋向かいのビルに、24時間営業の病院を開業します。もともと梅毒研究の医学博士ですので、夜の女を相手にした病院で、これが大繁盛でした。しかも、そればかりではなくて、何故か患者たちをイスラム教徒にすることを始めるのです。

1974年12月というのは、10月に石油危機が起こって、それで日本に石油が来なくなって大変だった時期ですね。この二木という男は、素早いですね。時局を読むのです。「これからはアラブと結び付けなくてはいけない」ということで、自らイスラム教に入信し、石油利権に食い込みます。実際中東を訪れ、サダム・フセインに会ったり、国際イスラム会議を東京で開いたりする。それで石油を、アメリカやヨーロッパには出さないけれども日本にだけは出すという国が出てきます。自民党から重宝がられて、機関誌『自由民主』にも登場します。

日本イスラム教団の方ですが、それまでも日本のイスラム教徒は、日本ムスリム協会というのがあって、原宿にちゃんとしたモスクがあるのです。そこで彼も洗礼を受けた上で、自分の教団、日本イスラム教団を作り、自ら総裁となった。それで、患者の夜の女たちを、最大時自称5万人を教徒にして、独自の大乗イスラム教の教団を名乗った。

この話はやりだすともうキリがないほど面白いのですが〔笑〕、詳しくは申し上げませんけれども、要するに、この三つの雑誌、『輿論』『政界ジープ』『医学のとびら』がポイントで、731部隊元隊員の慰霊塔や、「精魂会」という幹部同窓会の土台となるのです。

医学的成果の米軍への売り込み

まとめますと、二木秀雄は、もともと梅毒研究の医学博士だった。彼は、731部隊企画課長として、関東軍との連絡を仕事とした。同時に、結核・梅毒班の班長で人体実験も実行する。金沢では、その隠蔽工作に携わるが、その後はGHQに取り入って、データ提供で取引して、免責になる。

米軍に関東軍防疫給水部が知られていると分かったら、今度は、人体実験をしたことと、細菌（ペスト菌）を実際にばらまいたことだけは言わない。その代わり、ちゃんとした基礎的科学研究・医学研究をやっていたということを米軍に売り込む。科学の成果、医学的データを売ろうとする。これが石井四郎と731部隊の、戦後生き残り戦略でした。

その交渉の中心になったのが内藤良一で、それに二木秀雄がくっつく。『輿論』という雑誌を出して、占領軍におもねる。日本医学の成果として積極的に米軍にデータを売り込んで、免責から復権を遂げる。その黒幕に亀井貫一郎という政治家がいたのですが、今回は省略します。

それに合わせて、彼の出している雑誌『政界ジープ』の論調も、米軍には一貫して忠実なのですが、丁度「逆コース」の時代に変わっていく。当初の民主化・科学技術立国から、ゾルゲ事件は赤色スパイ事件だったとか、朝鮮戦争でペスト蚤を使うべきだというふうに変わっていくのです。

明治の毒婦
高橋お傳
昭和の遊京に正体を現わす!!
性生活展
入場料三〇銭

お伝の陰部の標本が公開された「性生活展」の広告

この辺の詳細は省略いたしますけれども、〔スライドを示し〕これが当時、『政界ジープ』に出ました「明治の毒婦、高橋お伝の標本を展示します」という松屋の性生活展の広告です。

それと併行して、厚生省医務局の『医学のとびら』を出して、医学会・医薬産業に彼は食い込んでいくのです。

左派系雑誌『眞相』との論戦

それから次の話との関係で、もう一言だけ言っておきます。先ほど言いましたように、1949年末に、ソ連が731部隊の関係者をハバロフスク裁判で裁きます。極東軍事裁判で連合国軍としては裁かなかったけれど、ソ連が独自に細菌戦を告発して暴いた裁判がありました。

この時に、左派のバクロ雑誌『眞相』1950年4月号は、「日本の軍隊はこんなひどいことをやっていた。ソ連の裁判でそれがちゃんと証明された」って特集するのです。二木秀雄の写真までつけて、「この男は今でこそ『政界ジープ』なんて雑誌を出し、出版社の社長をやっているけれど、実は、731部隊の軍医で、『実験で猿を解剖したことがある』と言っているけれど、その猿というのは実は人間だ」とか、そういう記事を出します。

それに対して『政界ジープ』50年4月号は、「いや、ソ連で行われた裁判は全部でっち上げで、架空の話である」と報じます。それば かりではなくて、朝鮮戦争が始まると、細菌戦は現代の戦争では重要なものである、細菌戦研究は今こそ役立つ、と『政界ジープ』誌上で主張し、開き直る。

どういうことかといいますと、当時原爆が第三次世界大戦の中心になると言われていました。1949 年秋にソ連の原爆実験も成功し、朝鮮戦争でも使われるのではないかといわれていました。

恐るべき細菌戦
地球の上に蚤が降る
—細菌戦物語—
山本容

ソ連軍は一応介入しないことになっていましたが、中共軍は参戦しました。そこで、二木秀雄は、これからの第三次世界大戦は、大都市では確かに、米ソ核戦争になる、しかし「せいぜい都市での原爆爆撃では数十万人しか殺すことは出来ない」。朝鮮半島や中国大陸では、もっと有効な武器がある。草原とか山の中ではゲリラ戦になり、細菌戦が有効だ、というのです。

「地球の上に蚤が降る」という記事が、『政界ジープ』52年4月号に載ります。『眞相』が報じた第二次世界大戦での日本の細菌戦はソ連製デマだが、第三次世界大戦の今こそ細菌戦が必要だ、これからの戦争は、都市での原爆戦と農村での細菌ゲリラ戦の組み合わせになる、こういう主張をはっきり述べるようになります。

『政界ジープ』の記者たちは総会屋へ

そのあと二木秀雄は、石川県で米軍内灘射撃場誘致が争点の54年参議院選挙に出て、惨敗したりするのですが、それは省略して、「政界ジープ事件」、スキャンダラスな恐喝事件の話を、ちょっと補足します。

井上印刷局長取調べ
背任容疑で逮捕状請求
二木元社長も逮捕
「政界ジープ」脅カツ事件

二木秀雄が社長の『政界ジープ』という雑誌は、もちろん彼一人で書いていたわけではありません。いろんな記者たちがいます。この記者たちの中に、編集長の久保俊広というのがいたのですが、彼は旧陸軍中野学校の出身でした。これは山本武利先生に中野学校の同窓会名簿で調べてもらって、確かめました。

この雑誌の編集部には、731部隊の出身者と共に、陸軍中野学校出身者、元大陸浪人とか、特務機関関係者が入っていました。この人たちは、記者ですから一応取材はします。しかし、取材してそのまま記事になるとは限りません。取材した「特ダネ」やスキャンダルは、載らない場合があります。「これ載せるけれど、いい」って、当時の大会社や銀行の総務あたりに持っていくのでしょうか。「この雑誌を何部引き取れ」とか、露骨にカ

ネをせびる。これが、いわゆる出版系総会屋の始まりです。

事実、『政界ジープ』出身の記者たちはその後、例えば小野田修二は『月刊ペン』、大橋一隆は東京電力の広報担当になり、マスコミ関係者を接待する。2011年3月11日の福島原発事故勃発時に、東電の勝俣会長は北京にいて、何故かマスコミの幹部たちと中国旅行中でした。そんな企業とメディアの癒着の起源が、実はこの『政界ジープ』にあったのです。そういう手法が、この『政界ジープ』という雑誌を通じてマニュアル化され、受け継がれていった。そこから本田二郎という記者は、平和相銀事件の小宮山英蔵の秘書になる。社長の二木は起訴され有罪になりましたが、部下の『政界ジープ』記者たちは、裏世界で生き残る。雑誌そのものは1956年に廃刊になりますが、731部隊は、総会屋の跋扈を残すのです。

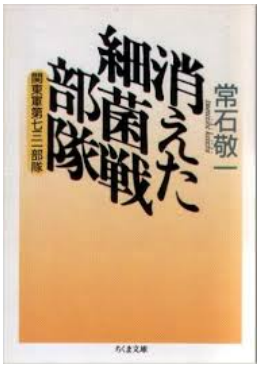
二木の大乗イスラムとは？

二木の石油危機にあわせたイスラム教入信ですが、彼が総裁の日本イスラム教団の教義が面白い。「大乗イスラム」と言っていますが、どういうものかというと、「アラーの他に神はなし」「ムハンマド（マホメット）は預言者である」。この2つの呪文さえ覚えて暗唱できれば、誰もがイスラム教徒になれる。 こういう教えです。要するに「難しいことではない」「とにかく、アラーを信じれば、お前はイスラム教徒だ」といって、それまでのコーランの教義を覚えなければいけないような日本ムスリム協会に対抗し、信徒を増やす。

しかし、本当の狙いは、実は石油利権で、財界・官界とは裏世界で繋がっていますから、アラブ産油国から莫大な利益を獲得するのに役立ちました。〔スライドを指し〕これは自民党に近い雑誌『自由』1981年7月号ですけれども、それに「イスラム復権への私見―日本人ムスリムとして考える」という論説を書く。元731部隊、恐喝事件被告の前歴は隠して、「自分は日本の真のイスラム教の代表だ。おれはサダム・フセインに会って来た」という話を堂々と書くようになる。

『悪魔の飽食』発刊以降

ちょうどこの1981年に、推理作家森村誠一の『悪魔の飽食』が出てベストセラーになります。1981年は、731研究では重要な年です。『悪魔の飽食』が出て、ほぼ同時に常石敬一さんという神奈川大学の先生の学術書『消えた細菌戦部隊 関東軍第731部隊』が出ます。 アメリカでも、1981年のジョン・パウエル論文から、731部隊研究が始まります。



ちょうど二木秀雄は、日本イスラム教団の代表として脚光を浴びたところで、731部隊での経歴が暴露される。森村誠一の本にも、二木秀雄の名前は出てきます。ただしすべてのインタビューを拒否したと出てくるのです。新宿の病院まで森村さんは行ったらしいのですが、残念ながら何の証言も取れなかったということです。

3　シベリア抑留――ソルゲ事件・731部隊との繋がり

さて、ゾルゲ事件や731部隊の問題が、一体どういうふうにシベリア抑留とつながっているかを調べてきて、今日ここでお話するのは、近衛文麿の子息文隆についてです。

近衛文麿は、ゾルゲ事件が起こった時の総理大臣で、ゾルゲの逮捕された日に東条内閣に代わって、すぐに日米戦争が始まる。大政翼賛会を設立し、大東亜共栄圏建設を掲げ、日独伊三国軍事同盟や日ソ中立条約を締結した、現代史の重要な政治家です。

近衛文隆の抑留死に米軍が注目

その長男に、近衛文隆という男がいました。彼は終戦のとき、1945年8月は図們という、当時のソ連と満州国の国境近くの部隊に配属されていて、中尉なのですけれども、そこで捕まって抑留されるわけです。

しかも、抑留者は1950年ごろまでに帰ってくるのですけれども、何故かその後も引き留められます。日本軍の戦犯というのは、普通将官クラスで、50歳から60歳の人が多いのですけれど、彼は1915年生まれで、まだ30代なのに何故か戦犯に指定されました。

先ほど言った731部隊についてのソ連のハバロフスク裁判の被告達も、戦犯として受刑していました。1956年秋の日ソ国交回復の頃は、近衛文隆と同じ収容所に入れられていたことが分かりました。

そのことを、アメリカ軍が注目していました。731部隊と、この近衛の息子が、一体どのように結びつくかを監視していた記録を、今年の夏休みにアメリカ国立公文書館で見つけてきたので、そのことをお話しします。

シベリア抑留の基本的な性格

シベリア抑留については、今日の参考資料の中に、事務局の方がいろいろと作って下さっておりますけれども、「抑留」という言葉を使っているのは、実は日本だけです。基本的には prisoners of war(POW) 、つまり戦争捕虜というのが、アメリカやソ連やドイツの扱いです。

その基本的性格は、私は奴隷労働力として留め置かれたということだと思っております。旧ソ連のスターリン粛清とシベリア抑留の関連を研究しているのですが、分かり易いのは、ソルジェニーツィンの『収容者群島』という本です。その中に「収容所地図」が出てきます。1930年代に粛清されたロシア人たちが如何に収容所で苦しい目にあったかが、地図で描かれています。

その地図と、日本の抑留帰りの人達が作った、日本人はこんな所に抑留されていたという記録を重ね合わせますと、場所はほとんど同じです。つまり、1930年代にソ連がスターリンの反対者を抑圧するために作った収容所を改装・増築する形で、日本人捕虜の収容所も作られたことが分かります。

日本では忘れられがちですが、一番戦争捕虜が多いのは、ドイツです。ドイツは1941年からソ連と戦争をやっていたわけで

すから。しかもドイツは、ソ連軍の兵士300万人以上を、ナチスの収容所で強制労働に使っていた。それに対する復讐として、スターリンはドイツ人240万人を捕虜にして収容所に入れた。日本人の6倍です。その他にもハンガリー人50万人。中国人も1万2千人、朝鮮人も8千人ぐらい、これは、白井久也さんという元朝日新聞記者の本からですが、24ヶ国で420万人が、いわゆる軍事捕虜、抑留者なのです。

従って、日本人抑留者の手記を見ても、大体収容所には日本人だけではなくて、ドイツ人や他の国の人達もいると記録されている。抑留問題を考えるには、実はドイツと日本の比較が重要なのですが、これは今日の主題ではありませんので省略します。

しかし、いわゆる抑留者、戦争捕虜の扱いは日本もドイツも同じで、ほぼ1950年までに帰国できます。つまり、本来ポツダム宣言で条件が整い次第祖国に帰すとされていた人たちを、ソ連は3年から5年引き伸ばして、戦後復興のための奴隷労働力にしていたのです。連合国の一員としては、帰国させなければならない。ただし、戦犯、戦争犯罪に問われた人たちは、別です。これは犯罪者ですので、そのまま留め置かれます。その数が、1955年で日本人が2378人いたということになっています。

収容所に残された戦犯と近衛文隆

アルハンゲルスキーというロシア人の『プリンス近衛殺人事件』(新潮社)という本によれば、その中で目立つのは、将官24人、関東軍の大将とかそういう人達とともに、元首相の息子の近衛文隆がいた、と出てくる。この人たちは、鳩山内閣で56年10月に日ソ交渉がまとまって、ようやく日本が国連に復帰できる時に、最高矯正労働25年だったのですけれども、恩赦という形で帰って来る。ですから基本的に戦犯であった人も、その後何人かは残るのですが、56年12月までに日本に帰国することになる。その最後の帰還予定者リストに、近衛文麿の息子も入っていたのです。

米陸軍によるStitch(縫い物)作戦

このシベリア抑留でよく知られているのは、ドイツ人捕虜も同じですけれども、抑留地の収容所で民主運動というのがやられ、『日本新聞』が配られて「これからは共産主義の時代だ」と宣伝して、ソ連と共産主義に対して忠誠を誓う。ソ連側は、ダモイ、つまり帰国を餌にして、「日本に帰ったら、ソ連に対して忠誠を誓い、ソ連側から何らかの要請があったらそれに従います」という忠誠誓約をさせる。皆早く帰りたいので、それを書いて帰ってきた人達がいる。

興安丸けさ舞鶴へ入港
ソ連から千廿五人が帰る
正剛

中には、帰国船で舞鶴港に上陸し、そのまま日本共産党本部にデモしたという例もありました。そういうことは、よく知られています。

同時にアメリカ側も、それを知って警戒しています。日本を占領しているのは、基本的にはGHQの米国軍です。米国軍人たちが、帰国船がやってくる舞鶴と函館に出かけて、日本に上陸する前に最初に接見する。GHQの日系二世などCIC(対敵諜報部隊)兵士が面接官で、そこで尋問を受ける。「お前はソ連でどんなことをやってきたか」、「ソ連側から何らかの働きかけがなかったか」、「働きかけに対してどうしたか、どう応えたか」、それでスパイであるかどうかをチェックする。シベリア抑留からの帰国者が、最初にやられたのは米国側尋問でした。

そこでちょっとでも「働きかけられた」と答えると、アメリカ軍は、それで捕まえるのではないのです。「よし、分かった。今度ソ連から話があったら、ぜひ俺のところに連絡してくれ」という。要するに、今度はソ連側の情報をとる二重スパイにする。これがアメリカ軍の狙いなわけです。

そういう形の尋問が組織的に行われました。これは実はドイツでも同じで、何十万人の尋問記録が残されました。Project Stitch(縫い物作戦)というのですが、ソ連スパイの摘発と、二重スパイ作りが目的の作戦だったのです。

米空軍によるWringer(絞り)作戦〔人間GPS〕

もう一つ、アメリカ空軍が主導した作戦があります。シベリア抑留の関係者の方が今日も何人かいらっしゃるようですが、山本武利先生のお父さんも犠牲者だったようですね。慶応大学の小熊英二さんは、抑留者であるお父さんの聞き取りを『生きて帰ってきた男』という岩波新書にした。それら多くの記録にも出てきますが、幸い生きて帰国した途端に、尋問を舞鶴で受けただけではなくて、故郷に帰って家族と再会してほっとしたところで、また呼び出され、尋問されたという例がある。県庁所在地のCIC事務所に呼ばれることが多いのですが、こちらの方は、実はアメリカの陸軍ではなくて、空軍の作戦です。これもドイツと同じで、Project Wringer(絞り作戦)といいます。

そこで何を聞かれるか。「お前がソ連から声をかけられたのは分かっている。それは、誰にも言わないからね」と言いながら、何を聞きだすかというと、「お前のいた収容所のすぐそばに港はあったか、飛行場はあったか、大きな目印になる建物は何か」等々と聞くわけです。こちらは政治的なことはほとんど聞かないで、地理情報を詳しく聞きだす。時にはスケッチさせるのです。

ドイツでは何十万人、日本人も1万人近くの聞き取り記録が残されています。この人たちからの聴取を、私は「人間GPS」と言っているのですが〔笑〕、つまり、その人たちの証言を重ね合わせていくと、ソ連と中国大陸と朝鮮半島の立体的な地図が出来上がるのです。

その専門のセクションが、GHQのG2に地理課、ジオグラフィカル・セクションというの

がある。有末精三、服部卓四郎、河辺虎四郎ら旧参謀本部の情報将校が使われ、戦犯容疑者・公職追放・政治情報が分析されたG2歴史課については、ある程度知られていますが、G2地理課の方は、ほとんど知られていません。しかし、アメリカにとっては極めて重要で、何をやるかというと、次の第三次世界戦争の戦略爆撃の候補地はここだ、潜水艦がここまで潜れるのはこの湾のどこまでだ、といったデータを集めていた。答える日本人帰還者の方は、何に使われるかは知らないで、「今日はあんまり政治のことは聞かれないで、収容所の周りの景色だけだったよ」などと家族にも言う。それがG2地理課からアメリカに送られて、ペンタゴンの白地図の中に一つ一つ落とされていく。

こういうことがやられていたのが、大体1948年から52年、朝鮮戦争の時が最高潮です。つまり、シベリア抑留帰還者は、ドイツ人捕虜に準じて、米国陸軍・空軍の対ソ作戦に協力させられたのです。

戦争捕虜補償、ドイツと日本の相違

ただし、西ドイツの場合は、1954年に、旧戦争捕虜ドイツ人の補償に関する法律という国内法ができました。帰還者は、政府と米軍の立ち会いのもとで、日本でやられたような尋問を受けたのですが、それがそのまま戦後の国家補償に結びつきました。ソ連で軍事捕虜になったのはドイツ軍兵士としてですから、その間は労働期間として認めるということで、西ドイツ国家に補償された。

ところが、何故か日本では、シベリア抑留帰還者の人達は、帰ってきたら「あいつはアカになって帰ってきたのではないか」といわれて、近所で陰口される、就職もうまくいかないという目に遭わされるわけです。本来は、日本政府が国として認めて補償しなきゃいけなかったのですけれども、それがなされたのは、なんと5年前の2010年です。

戦後強制抑留者にかかわる特別措置法、シベリア特措法というのが作られます。これは2010年に、まだ生きている旧シベリア抑留者の人たち、もう80歳から90歳の人達です。この人たちに対して25万円から150万円を抑留期間に応じて一時金で支払うという法律ができて、ようやく、シベリア抑留帰還者の人達は、いわば市民権を得るかたちになる。ドイツに比べれば、非常に厳しい扱いだったのです。

科学者・技術者の特別扱い

戦争捕虜全体の中で、大きな例外になったのが、科学者・技術者たちです。これについては、第2次世界大戦の終結時に、原爆づくりのマンハッタン計画のなかに、米英軍が他国の科学技術情報を収集するアルゾスという特別部隊の作戦がありました。これは、ドイツがどんな軍事情報、例えばV-2ロケットとか、潜水艦Uボートとか、そういうアメリカにとって喉から手が出るような技術と技術者を、ドイツから奪う。ソ連が入ってくる前に、アメリカが獲得する秘密作戦です。

その代わり、貴重な軍事科学情報を提供したものは免責。つまり戦犯に訴追しない。それどころか、アメリカに連れて行って贅沢な研究環境のもとで、好きな研究をやらせて、それをアメリカのために役立てる。こういう作戦が、すでに始まっていました。

しかも、ドイツは1945年4月末には敗戦が決まり、ヒットラーは自殺する。アメリカは、この作戦をどういう名目でやったかというと、ド

イツは敗れた、しかし日本はまだ残っている。日本との最終戦争に勝利するためには、ドイツの高度な軍事技術が必要である。しかも日本軍の技術は、大体ドイツの影響で作られている。これを口実にして、ドイツ人の科学者・技術者1000人以上をアメリカに連れて行った。この人達は、戦犯にならないで、むしろその後の原爆開発、それからV-2ロケットの延長でのミサイル開発に携わります。生物化学兵器、細菌戦技術の開発にも使われて、朝鮮戦争やベトナム戦争で実戦に使われる。ペーパークリップ作戦といいます。

もともとすぐれた科学者・技術者には、ユダヤ人も多いわけです。だからアメリカに亡命した方がいい。ドイツの本国に戻らないで、そういう研究開発を仕事にする。

同じようなことを、ソ連も当時狙っていました。ソ連が占領した旧東ドイツ地域では、科学者たちは最初モスクワに連れて行かれて、その後カザフスタン等々の原爆開発の秘密都市で使われた記録が見つかっています。

私は、731部隊、石井四郎や二木秀雄ら人体実験・細菌戦を行った医師たちの極東軍事裁判不訴追・免責も、この米ソの科学者・技術者争奪戦の一環だったと考えています。

以上をまとめると、米軍の抑留帰還者に対する作戦には2つあって、一つは、陸軍のProject Stitch(縫い物作戦)。もう一つは、「人間GPS」というべき空軍のProject Wringer(絞り作戦)です。日本占領では、G2ウィロビー将軍傘下の歴史課、キャノン機関のスパイ摘発はよく知られていますが、G2地理課でソ連の地図を作っていたことはあまり知られていない。これも詳しく話すと時間がかかりますので省略します。

第2のソルゲ・スパイ団を想定した米国

スパイ摘発のProject Stitchの成果は、元時事通信ワシントン支局長の名越健郎さんが、私より早くこの総括記録を調べて、概要を割り出しました。米国国立公文書館の記録によると、ソ連スパイ352人が舞鶴での尋問で見つけられ、うち138人が自分はソ連に対して忠誠を誓ってきたと告白し、そのうち32人は、実際に帰国後にソ連から働きかけを受けた、と挙げられています。

それで1950年代になりますと、アメリカ側は、抑留帰還者の尋問記録に基づいて、日本には「第2のソルゲ・スパイ団」があるとみなすようになる。つまりソ連は、戦時中のゾルゲ・尾崎よりももっと大きなスパイ団を日本でつくっている、と考えて、実際約200人の容疑者の名前を挙げて、「伊藤雅夫」という樺太出身の抑留者を中心としたスパイ団がある、とでっち上げようとしました。これは、昨年、ゾルゲ事件の東京国際シンポジウムで私が報告しましたので、省略いたします。

ラストボロフ事件・ハバロフスク裁判

ソ連の抑留者工作・諜報活動が実際に明るみに出たのは、ラストボロフ事件です。1954年2月に、ソ連大使館員でKGB のラストボロフが、CIAの手引きでアメリカ大使館に逃げ込み、そのままアメリカに亡命した事件がありました。そのときラストボロフというソ連のKBGスパイが明らかにしたのは、「日本人エージェントを少なくとも36人使っていた」ということで、この36人の名前と経歴が、警視庁の極秘報告に入っています。

ラストボロフの証言にもとづくその報告書を元に、三好徹、松本清張、檜山良昭と、3人もの推理作家が、ラストボロフ事件について小説を書いています。

この元KGB諜報員ラストボロフのCIAに対する証言によって、高茂礼茂、庄司宏、日暮信則、志位正二と、外務省の役人の中に4人ものソ連スパイがいたことが明らかになった。しかし証拠不十分で、大体皆不起訴となる。日暮は取り調べ中に、警視庁の窓から飛び込んで自殺するということで、うやむやになってしまう。しかし、捜査記録そのものは残されているのです。

こういうスパイ合戦を調べていきますと、一つは先ほどの、49年末にソ連で行われた731部隊についてのハバロフスク裁判が重要です。これは当時、ソ連の告発は、極東委員会で米英により拒否される。当時のソ連のやり方も問題です。「日本人はこんな細菌戦や人体実験をやったのだから、最高責任者の昭和天皇も戦犯だ」と、極東軍事裁判で結審した問題を、朝鮮戦争の直前に蒸し返しています。

アメリカやイギリスは、もう連合国の極東軍事裁判は終わったのだからと、それを拒否する。けれども実は、その裁判にいたる尋問記録がソ連崩壊後に出てきて、そこでの731部隊関係者の証言は、おおむね事実であったことがわかったのです。

当時、このハバロフスク裁判について報道したのは、先ほどの『政界ジープ』とか『眞相』とかのバクロ雑誌です。『レポート』という当時時事通信が出していた情報雑誌の1950年3月号も、大きく特集しています。しかし朝日、毎日、読売の大新聞には、ほとんど出てこない。アメリカ政府とGHQが、裁判そのものをソ連のでっち上げであると否定したという話で、記事にはなっていますが小さな扱いです。

細菌戰用兵器ノ準備
及ビ使用ノ廉デ起訴サレタ
元日本軍軍人ノ事件ニ
關スル公判書類

外國語圖書出版所
モスクワ・一九五〇年

ですから、731部隊のハバロフスク裁判については、当時はこの週刊誌風バクロ雑誌が一番よく書いていた。被告になったのは12人ですけれども、それが山田乙三関

東軍司令官・大将、梶塚隆二軍医部長・軍医中将以下らで、このうちの川島清軍医少将、柄沢十三夫軍医少佐、西俊英軍医中佐という3人の731部隊の幹部が一番詳しく供述し、その中で人体実験の模様とか、細菌爆弾の作り方、どう撒いたかなどが語れていた。今、被害者である中国側は、どこに細菌がばらまかれ、どんな被害が出たかを調べるときに、このソ連の裁判記録、1950年に日本語に訳された『細菌戦用兵器ノ準備及ビ使用ノ廉デ起訴サレタ元日本軍軍人ノ事件ニ関スル公判書類』を参考にしています。

731裁判被告・柄沢十三夫医師

その詳しい供述を残した3人の中の1人、柄沢十三夫という医師が、米国側の監視対象の一人でした。柄沢十三夫は、ソ連での裁判で、日本軍の暗部を正直に全部話したわけです。しかし、医師としては、なかなか真面目な人間だったようです。

ただ、真面目な人間こそ、731部隊のようなところでは、怖いのです。例えばどういうことを言っているかといいますと、彼ではないのですが、731の医師の手記を読むと、「私は、確かに憲兵隊が連れてきた抗日戦の中国人捕虜を人体実験に使った、しかし彼らはどうせ死刑になるはずだった、その死刑になるはずだった人間を、最後に人類のために役立てるために使った」などという。つまり、「自分らは、科学技術発展のためのデータとして、マルタを使ってあげた」と堂々と語る。こういうことを真剣に話す医師が出てくるのです。

写真中央の柄沢十三夫は、1949年末に矯正労働20年の判決を受けて、イヴァノヴォというソ連の収容所に入っていたのです。1956年10月19日、鳩山首相とソ連の間でようやく共同宣言がまとまり、日ソ国交回復が決まって、2ヶ月後には戦犯も恩赦で帰れると決まったそのときに、この医者は、首を吊って自殺してしまう。その自殺の原因について、後に残された奥さんは、「自分のしたことを日本人は許してくれないと考えたからではないか」と言っています。これは素直に読むと哀しく美しい話なのですけれども、アメリカ軍は、そんなのは信じない。重要証言をし、細菌戦ノウハウを持っていたからソ連に殺された、と疑うわけです。

プリンス近衛文隆と鄭蘋如の恋？

もう1人、米軍にその抑留死を疑われた人物が、ようやく出てきました。これが、近衛文隆です。近衛文隆について、是非皆さんに読んで頂きたいのは、西木正明さんの『夢顔さんによろしく』というノンフィクション

風フィクションです。「最後の貴公子・近衛文隆の生涯」というサブタイトルで、文庫本になっています。

それから工藤美代子さんの『近衛家七つの謎』(PHP　研究所)でも、文隆が主人公です。同時に、ロシア人アルハンゲルスキーが書いた『プリンス近衛殺人事件』(新潮社)の主人公であり、何よりも、劇団四季のミュージカル『異国の丘』、ご覧になった方もいらっしゃるでしょうか、このヒットミュージカルの主人公「九重秀隆」のモデルが、実は近衛文隆で、この西木正明の小説が下敷きになっています。

なぜ、近衛文隆は「異国の丘」の主人公になるかというと、〔スライドを指して〕これが柄沢十三夫です。これが近衛文隆。
柄沢十三夫が1956年10月に首つり自殺した時に、この死体を発見したのが、年齢が近い友人であった近衛文隆で、その後、彼は3日間一睡もできなかったと、ソ連側の記録に出てきます。そのまま身体を壊して、柄沢が死んだ10日後、1956年10月29日に、近衛文隆も、帰国を目前に控えて亡くなったということになっております。

もともと近衛文隆は、貴公子と呼ばれました。アメリカのプリンストン大学に留学し、ゴルフ部の主将を務めて、全米学生選手権のゴルフ優勝という記録を持っています。身長180センチを越える大男で、丈夫で健康なスポーツマンでした。1938年に帰国して、第1次近衛内閣では、父の首相近衛文麿の秘書を務め、さらに39年には、中国大陸を見て勉強しろと父にいわれて、東亜同文書院という、当時上海にありました近衛家の作った日本人・中国人学生のいる大学に学生主事として派遣されました。

そこで、中国人だが母は日本人の絶世の美女、鄭蘋如(テンピンルー)と知り合う。テンピンルーは、ハリウッド映画『ラスト・コーション』のヒロインのモデルであり、何冊か日本語の本も出て生ます。彼女は、父は国民党政府の高官で、中国国民党のスパイとして

近衛文隆に近づいたといわれる。文隆の方はその美貌に夢中になった。それが憲兵隊に睨まれ、帰国し徴兵されて、二等兵から再出発することになった。

日本の首相の息子近衛文隆と、蒋介石政権高等検察官の娘の鄭蘋如が、日中戦争中に仲良くなった、彼女は実は女性スパイで、文隆はハニートラップにひっかかったという、悲恋話の主人公でもあります。

文隆はゾルゲ、尾崎秀実とも知り会う

これも詳しくやりだすと時間が足りませんので〔笑〕、簡単に済ませますが、プリンス近衛文隆というのは五摂家筆頭近衛家の跡取り息子です。それも政治家志望で、早くから英才教育を受ける。

ゾルゲ事件との関わりでは、プリンストン大学にいた時に、1936年にヨセミテで太平洋調査会（IPR）の国際会議があった。そこで日本代表団の通訳・事務局として、日本からやってきた尾崎秀実、牛場友彦、西園寺公一、つまりゾルゲ事件被告の尾崎や宮中関係者と知り合っている。

それから1938年に、父親の近衛首相の秘書として、書記官長が風間章、岸道三・牛場友彦が先輩秘書ですけれども、内閣嘱託の尾崎やドイツ大使嘱託のゾルゲとも会っているわけです。

このことに西木さんや工藤さんは注目しますが、私は、ゾルゲ・尾崎と近衛文隆の繋がりには否定的です。首相秘書官当時の文隆は23歳、たんなる鞄持ちの書生です。プリンストンを出たと言いましたが、正確に言うと、成績が悪くてプリンストンをちゃんと卒業

できなくて、ゴルフと女遊びがひどくて呼び戻され〔笑〕、帰ってきたばっかりだったのです。ゾルゲ・尾崎と面識はあったが、まあ23歳の政治家見習いですから、おそらくゾルゲ団の諜報活動では相手にされない存在であったと思います。

小野寺信機関での重慶工作？

しかし翌39年に、小野寺信という、終戦時ストックホルムからヤルタ協定密約電を日本に送ったということで有名な陸軍の情報将校が、当時上海に小野寺機関を作っていました。そこに、東亜同文書院学生主事として赴任した近衛文隆が組み込まれます。近衛文麿首相は、影佐機関などが汪兆銘工作をやっていたのとは別に、なんとか蒋介石政権と直接和平交渉ができないかというので、宮崎龍介とか西園寺公一らの別ルートでも、重慶の蒋介石のところに密使を送ろうとしていたといわれます。

その一環として、父近衛首相の了解を得て、小野寺信のもとで近衛文隆も重慶工作を試みました。相手が美しい女性で、国民党スパイと自覚したかどうかはわかりませんけれども、重慶政権の高官の娘と恋に落ち、重慶に出向く道を探った。だから鄭蘋如問題には、それなりに政治的な意味合いがあった。 そのことが憲兵隊にとがめられ、後に閣議でも問題になる。これは木戸幸一日記にも出てきます。

砲兵中尉のときに満州で敗戦

このまま近衛文隆を上海においておくと、必ず中国側から何か工作されて、日本にとってよからぬことになるからと呼び戻されて、すぐに徴兵され、中国大陸に渡った。関東軍の2等兵から、一歩一歩はい上がって、敗戦のときには砲兵中尉でした。

普通中尉ぐらいでは、捕虜虐待などの実行犯でなければ、戦犯にはならないのです。しかし、近衛文麿の息子だから、政治的に利用価値がある。終戦の前に近衛文麿は、天皇の側近として、革命阻止のための近衛上奏文を書いた、マッカーサーに新しい憲法を作れと言われたともいわれ、重要な役割を果たした。最後はA級戦犯に指定されて、自殺する。

ソ連の忠誠工作失敗と25年の刑確定

近衛文隆は、敗戦時こういう位置にあり、それでソ連側にとっても価値があった。

平たく言えば、プリンス近衛に、先ほど言った忠誠誓約をさせて、ソ連のエージェントにして日本に返し、政治家として保守政党の中でもいいから偉くなれば、ソ連にとっては長期的に極めて役に立つ。こういう目的

で、各地の収容所で、いろいろな工作を受けた。その関係のソ連側の尋問調書は、アルハンゲルスキーが、ソ連崩壊後初めて近衛文隆関連のソ連側資料を見つけ、『プリンス近衛殺人事件』に詳しく書いています。

ただし、それによると、近衛は頑強に「いや自分は日本人で、ソ連の手先になるわけにはいかない。ソ連との友好関係は保ちたい。しかし、それは、新しい新生日本の中でどの国に対しても我が国がとるべき道だ」というような模範解答をするものですから、ソ連側も嫌気がさして、ついに1951年、朝鮮戦争の最中ですけれども、矯正労働25年の判決を下した。どういう罪かというと、ソ連刑法58条4項。58条4項は「国際ブルジョワジー支援」の罪で、なんでも罪になっちゃうのです。アメリカに留学したこと、戦犯である父の秘書であったこと、その他が反ソ・親資本家活動であるということで、25年の刑を受けてしまう。25年というのは、当時のソ連に死刑はなく、最高刑です。そうした最高刑・重刑の人々が、1956年、日ソ国交回復の時には、関東軍幹部や元特務機関員、731部隊関係者など、同じイヴァノヴォ収容所に入れられていたのです。

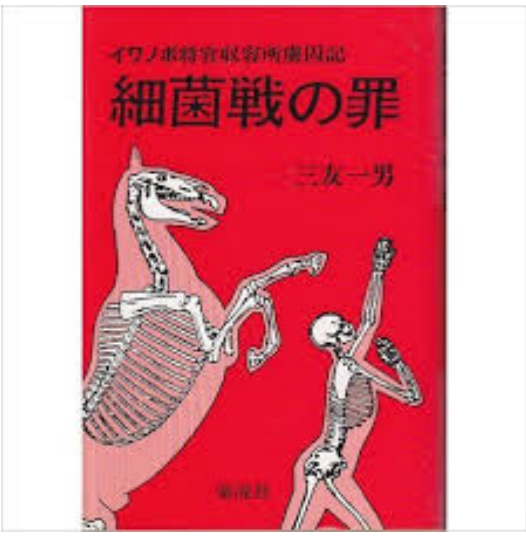
ですから、プリンス近衛は、戦犯としては山田乙三大将、秦彦三郎中将ら老人が多いなかに、収容所で40歳を迎えたばかりの若さで、一緒になるのです。

イヴァノヴォ収容所の3人の若い戦犯

若い収容所の被告というのは、実はもう1人いた。それが、それがさっき言った柄沢十三夫、1911年生まれで40代です。731部隊受刑者の中の若い医師で、この2人は仲良くなった。

もう一人、文隆より5歳年下の若者がいた。吉田武彦といって、近衛文隆と収容所の中で同じ部屋、同じ二段ベッドの上下で親しくなります。若いが元特務機関員ということで、戦犯になっていたのです。これが怪しいと、アメリカ側の記録に出てくる。彼は、収容所の中でいつも近衛と一緒で、部屋の中で他の関東軍将校とどんな会話をするのかを全部ソ連側に伝えるための、同獄スパイだった可能性が高い。

これは、日本でも特高警察や憲兵隊が昔よくやったのですけれど、同じ獄中に相部屋のスパイがいて、「あいつこんなことを言っていた」と告げ口する、そういう役割の男がいた。この3人が、イヴァノヴォ収容所中で、相対的に若く、仲間になった可能性が高い。731部隊の受刑者であった三友一男の俘虜記が残されています(『細菌戦の罪』泰流社)。

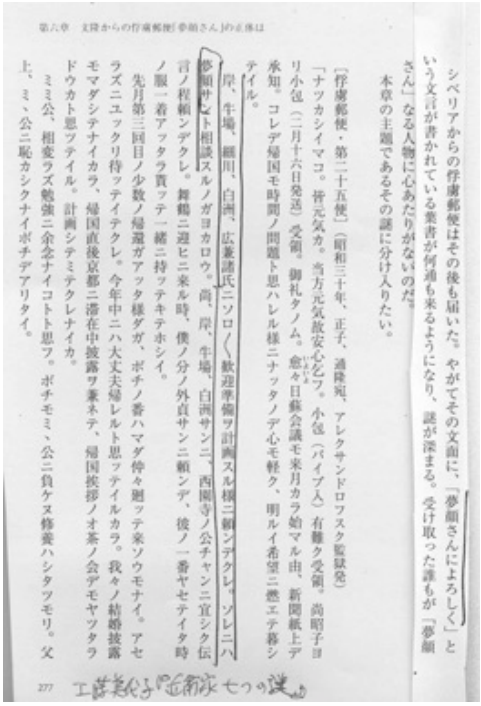


そのうちの2人、つまり、近衛文隆と柄沢十三夫が、1956 年10月、柄沢が19日から20日の夜、つまり日ソ国交回復の日に首吊り自殺をする。その首吊り自殺をした柄沢の

遺体を目撃した近衛文隆は、そこでうつ病になって眠れなくなり、10日後には、一応死因は高血圧となっていますけれども、「病気」ということで、相次いで死亡した。米軍は、これは怪しいと考えた。本当の死因は何であったのか、それが一つの謎です。

文隆の手紙中の「夢顔さんによろしく」

もう一つの謎が、近衛文隆は矯正労働25年で刑が確定したので、1952年から、日本との通信を許されるようになる。日本語新聞も読めたといいます。妻正子ら家族にあてて、近衛文隆は40数通の手紙を残しています。そのうちの最後の方の6通に、変な文章が出てきます。遺族が作った『近衛文隆追悼集』に入っていますが、西木正明と工藤美代子の本にも引用されています。


シベリアからの俘虜郵便はその後も届いた。やがてその文面に、「夢顔さんによろしく」という文言が書かれている葉書が何通も来るようになり、謎が深まる。受け取った誰もが「夢顔さん」なる人物に心あたりがないのだ。
本章の主題であるその謎に分け入りたい。
〔俘虜郵便・第二十五便〕（昭和三十年、正子、通降宛、アレクサンドロフスク監獄発）
「ナツカシイマコ。祥元気カ。当方元気故安心乞フ。小包（パイプ入）有難ク受領。尚昭子ヨリ小包（二月十六日発送）受領。御礼タノム。愈々日蘇会議モ来月カラ始マル由、新聞紙上デ承知。コレデ帰国モ時間ノ問題ト思ハレル様ニナッタノデ心モ軽ク、明ルイ希望ニ燃エテ暮シテイル。
岸、牛場、細川、白洲、広兼諸氏ニソロ〳〵歓迎準備ヲ計画スル様ニ頼ンデクレ。ソレニハ夢顔サント相談スルノガヨカロウ。尚、岸、牛場、白洲サンニ、西園寺ノ公チャンニ宜シク伝言ノ程頼ンデクレ。舞鶴ニ迎ヒニ来ル時、僕ノ分ノ外貞サンニ頼ンデ、彼ノ一番ヤセテイタ時ノ服一着アッタラ貰ッテ一緒ニ持ッテキテホシイ。
先月第三回目ノ少数ノ帰還ガアッタ様ダガ、ボチノ番ハマダ待々廻ッテ来ソウモナイ。アセラズニユックリ待ッテイテクレ。今年中ニハ大丈夫帰レルト思ッテイルカラ。我々ノ結婚披露モマダシテナイカラ、帰国直後京都ニ滞在中披露ヲ兼ネテ、帰国挨拶ノオ茶ノ会デモヤッタラドウカト思ッテイル。計画シテミテクレナイカ。
ミミ公、相変ラズ勉強ニ余念ナイコトト思フ。ボチモミヽ公ニ負ケヌ修養ハシタツモリ。父上、ミヽ公ニ恥カシクナイボチデアリタイ。
277
工藤美代子『近衛家七つの謎』

1955年5月21日の第25便以降、岸道三牛場友彦、細川護貞（細川首相のお父さんですね）、白洲次郎、そして広兼というのは満洲で世話になった人ですが、そうした親しい友人たちに「そろそろ自分も帰国するから帰国準備の歓迎の計画を立てるように頼んでくれ」と、留守家族あてに書く。そこに、それには「夢顔さんと相談するのがよかろう」、「なお岸、牛場、白洲に、西園寺のこう（公一）ちゃん等々によろしく伝えてくれ」とあるのです。

正子夫人らも周知の、親しい友人たちの名前が出てくる中に、何故か「夢顔さん」という不思議な名が出てくる。そういう「夢顔さんによろしく」と出てくる手紙が、1955−56年に、6通あるのです。

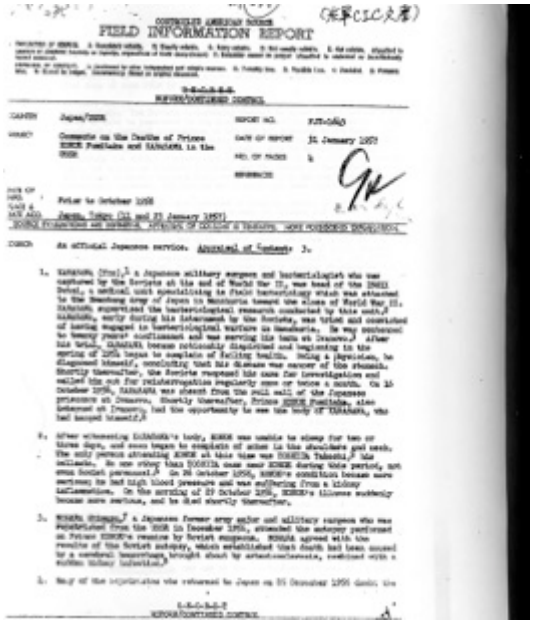
これをネタにしタイトルにしたのが、この西木正明さんの推理小説です。「夢顔さん」というのは、留守家族の奥さんも、母親（近衛文麿は自決しましたけれども近衛夫人は存命中）も、みんな誰も心当たりがなく、わからないのです。収容所からの手紙は、無論検閲されますから、恐らく要人で信頼できる誰かのことを、「夢顔」という名前で、家族に伝えようとしたのだろう。これは、私を含め、読めば誰でも感じる、共通の印象です。

この「夢顔」が誰であるか。つまり、自分の歓迎会を開く最高責任者といいますか、もっとも相談すべき人物として出てくる、この男はだれなのかというのが、このあと3冊も文隆本が出てくる謎なのです。

「近衛文隆ファイル」を見つけて

私は、今年の夏に、アメリカ国立公文書館で「近衛文隆ファイル」を見ていて、びっくりしたことがあります。これは扉に続く1頁目なのですけれど、「近衛文隆ファイル」の最初の文書の冒頭から出てくるのは、近衛の名前ではないのです。Karasawa （柄沢）という名前が出て来る。つまり、「731部隊の

柄沢という男が首をつって死んだ。その死を近衛文隆は目撃していた。この2人の死は、どちらも怪しいから、アメリカ軍としては検討しなければならない」という死因を疑う検討記録が出ている。


FIELD INFORMATION REPORT

これは、これまで近衛家を研究した記録には出こないものです。近衛文麿、これは有名な政治家ですから、米国にも大きなファイルがある。近衛秀麿ファイルもあります。これは文麿の弟で、クラッシック音楽の指揮者で、今年の夏にNHKが「戦場のマエストロ」という面白い番組を作りました。その元となったのが「近衛秀麿ファイル」で、やはり米国国立公文書館の米軍記録の中に、秀麿がドイツで密かにユダヤ人を助けていた記録が出てきた話です。

もう一つの近衛家の記録が、この「近衛文隆ファイル」です。731部隊の柄沢十三夫の死と、同じ収容所での近衛の近接した二人の死を疑い、分析した、米国陸軍情報部の記録です。柄沢が死んだときに、近衛がそれを見てショックを受け、それで心身がおかしくなって彼は病死したといわれるのですが、その死因を疑っています。

二人の近接死と死因の謎

西木正明さんの『夢願さんによろしく』では、柄沢の名前が「唐津」とされていますけれども、この死が近衛文隆とほぼ同時であることをどう見るか。片方（柄沢）は自殺、片方（文隆）は病死となっているが、ひょっとしたら同じ死因ではないかというのが、米軍の推論です。さらに、文隆の最後を看取った重要人物が、何人かいるのです。

1人は、収容所のソ連側の医者です。しかし日本人の731部隊関係者も医師で、文隆と同じ収容所の同じ大部屋にいるわけです。その中でも、西俊英という、ハバロフスク裁判での18年の受刑者が、二人の最後の看取り役でした。731部隊教育部長だった優秀な医師ですから、もちろん診療も治療もでき、薬も処方できるわけです。

それから、吉田武彦です。彼は、おそらくソ連側に通じた監視人ですが、いつも文隆と一緒でしたから、彼も毒をもったり、騙して飲ませることが、できるわけです。

一番あり得る可能性と米軍が見たのは、精神を錯乱する特殊な薬物です。元KGBのラストボロフが、ちょうどこの頃アメリカに亡命していて、わざわざこの事件のために、アメリカのCIAで聴取を受けます。そこで、近衛文隆は必ずしも戦犯ではない。彼は政治的目的で残されているのだ、と話す。それから、ソ連の収容所では、薬物を少しずつ与えながら、長期的に証拠を残さず殺してしまう緩慢な殺人が行われていた、と証言します。「精神安定剤とか何とか言いながら飲

ませて、躁鬱病にして、静かに殺すのはよく知られていることだ」と証言するのです。

アメリカは、二人とも死因はそれではないかとか疑う。ソ連の精神病棟で使われていた薬です。これはもう11年も収容されていましたから、ずっと少しずつ与えられていた可能性もある。解剖しても痕跡が残らず、死因がわからない、そういう薬だったのではないかという謎です。

ですから近衛文隆の死因については、病気という公式説とは別に、殺人説がある。殺されたとすれば、ソ連の担当医が処方したのではないかと疑われる。

それから、先ほどの731部隊の医者がいます。特に最後の10日間ぐらいは昼夜交代で、軍医たちが枕元で看護している。ソ連側が彼らを使って、彼ら自身の意志というよりも、ソ連軍から言い含められてか、騙されてか、何かを盛った可能性がある。

また医者とも別に、近衛文隆が一番信頼していた吉田武彦という若い元特務機関員がいた。この吉田が、実は、収容所での近衛文隆の葬儀で友人代表の弔辞を述べ、2ヶ月後に帰還して、遺品と言って文隆の髪の毛を、奥さんに舞鶴港で渡す役を果たすのです。この男も、長期に薬を盛っていた可能性がある。

いくつかの可能性があるけれども、いずれにしろアメリカ側は、近衛文隆は単なる病死ではないと考えていたことが、この近衛文隆ファイルから分かります。

西木正明の「夢顔＝ゾルゲ」説

もう一つの大きな謎が、「夢顔さんによろしく」です。最後の死ぬ直前まで日本に帰国することを夢見て信じていた文隆は、「自分が帰国した時、結婚式をもう1回やろう」などと正子夫人に書いているのですけれども、その時に「お世話になる」「よろしく」と言って、おそらく親しい友達より年上の、誰かに頼っていた、その「夢顔さん」とは誰なのか、という問題です。

これについては、大きく2つの説があります。西木正明さんは「夢顔＝ムガン＝ゾルゲ」説です。西木さんのこの小説はよくできていて、柄沢（731部隊の関係者）と同じ時期に近衛が死んだという話も、毒殺の疑いも、一応出てくる。けれどもその関係を、米軍ほどには厳しく見ていない。

それで、西木さんの「夢顔」の推理は、当時ソ連との国交回復の交渉中だったことに着目します。ソ連に対して働きかけるには、ソ連に近くて影響力のある人物に頼めば、ひょっとしたら自分の帰国は早くなるのではないかと考えただろう、というのが西木さんの推理です。それに1番いい人物は、リヒャルト・ゾルゲ、つまりソ連赤軍のスパイだと文隆も認識している、元ドイツ大使館嘱託ではないか、と推理します。

けれども、ゾルゲは日本で死刑になっている。そこで西木さんは、尾崎秀実とゾルゲが1944年11月に死刑になったことを、近衛文隆は満州に派遣されていて知らず、その後そのままシベリア抑留の収容所生活だったので知らなかったのではないか、ゾルゲがまだ生きていると思って、ゾルゲに頼めばうまくいくと考えたのではないか、というのが、この『夢顔さんによろしく』での推理です。

その場合、どういう筋で「夢顔＝ムガン」となるかというと、「ムガン高原でゾルゲは生まれて、彼の幼少期のアダ名はムガンだった」と、これは西園寺公一が風見章に語った話にするのです。これは、小説としては面白いですが、話がうますぎて、史実としては根拠が乏しい。彼が生まれたバクーという町は、ムガン高原に近いですけれども、200キロぐらいあります。彼が幼い頃にムガンというアダ名があったということもありません。この部分は、小説としてはよくできているけれども、史実としては認められません。

工藤美代子の「夢顔＝高松宮」説

それより相対的に説得力のあるのは、工藤美代子さんの説です。『近衛家七つの謎』で、当時、昭和天皇のことを「龍顔」つまり、ドラゴン・フェイスと呼んでいた。だから、「夢顔」というのは「龍顔」に近い、しかし天皇ではない、皇室の誰かではないか、というのが工藤さんのアイディアです。

その説でいきますと、天皇の弟高松宮は、近衛文麿と一緒に終戦直前に和平工作を行っている。吉田茂なんかを使ってイギリスに働きかけようとした。文隆にとっても、近しい存在だった。要するに「親父は、皇室の中でも高松宮を信頼していた。だから、高松宮にすべてうまくいくように取り図ってくれ」というメッセージだというもの。天皇がドラゴン・フェイスであれば、高松宮がドリーム・フェイスではないかというのが工藤説です。

工藤さんは、この「夢顔」について、近衛家の遺族にもいろいろ聞き取りをしたのですが確定できず、「この部分は私の推定です」と断っていて、全体はノンフィクションですけれども、その部分だけはフィクションと認めている。けれども、少なくとも「ムガン＝

ゾルゲ」説、つまり、西木さんの小説よりは、うまくできている〔笑〕。

私の「媒酌人・木戸幸一」説？ほか

家族・親族も知らないし、牛場友彦、岸道三、犬養健、白洲次郎ら友人たちにもわからなかったのが、「夢顔さん」です。この「夢顔」については、6通の文隆の手紙にしか残っていません。「ムガン」と読むか「ユメガオ」なのかも、わからない。当の近衛文隆は、待望の帰国を目前にして、死んでしまった。

ですから永遠のなぞです。逆にいえば、抑留中の40数通の手紙に実名が出てこない重要人物のなかで、幾らでも推理はできるわけです。

それで私の説は、さしあたり、敢えて「夢顔＝木戸幸一」説ということにしておきます〔笑〕。どういうことかと言いますと、木戸幸一は、もともと近衛と同じ皇室側近で、戦時の1944年に、近衛文隆が正子夫人（京都西本願寺大谷家の娘で皇太后の姪）と結婚したときの、哈爾浜で行った結婚式の媒酌人・仲人です。

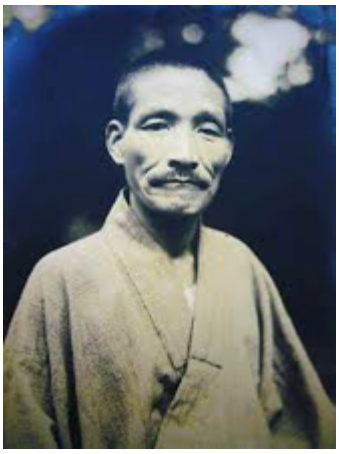
つまり、近衛と木戸とは敗戦時にあまり関係が良くなかったとも言われますが、近衛家の跡取りの結婚式には、当時内大臣で、昭和天皇に一番近かった木戸が、父近衛文麿は出席できないのに、わざわざ哈爾浜まで出かけて、戦争の最中に媒酌人をしているのです。当時ですから、仲人なら妻に万事相談せよというのは当然で、私は、その可能性があると思うのです。

しかし、これもフィクションにならざるを得ない。というのは、木戸幸一は、極東軍事裁判のA級戦犯で、終身刑を受けている。彼が病気を理由に巣鴨から釈放されるのは（岸信介や児玉誉士夫はもっと早く出ていますが）、1955年10月です。それまで彼は、巣鴨に入れられたままです。「夢顔」の初出する手紙よりも後になります。

ですから、近衛文隆が、シベリアにいてどれだけ日本の情報を持っていたか。木戸幸一が、父と同じくA級戦犯を言い渡されたぐらいは、多分知っていた可能性があるのですが、死刑か終身刑か、まだ獄中にいるかどうか、釈放されたかどうかは分かっていない段階で、1955年5月21日付手紙から「夢顔さん」が出てくる。そこで果たして、媒酌人木戸幸一が「夢顔さんによろしく」の「夢顔さん」になり得るかどうかという疑問は、依然残ります。

さらに言えば、風間章、つまり、近衛内閣の書記官長。岸道三や牛場友彦の上司で側近です。彼の名も手紙に出てこないので、「夢顔さん」になりうる。彼は戦後社会党の代議士になって、日ソ交流にも熱心で、

1958年に近衛の遺骨を日本に引き取る時には、重要な役割を果たすわけです。彼も、いわば有資格者です。



それから、中山優をご存知でしょうか。第1次近衛声明の原案を書いた、東亜同文書院出身の満洲建国大学教授で、近衛文麿の信頼が厚かった。それが中山優です。

木戸・風間・中山の3人は、手紙の中に多くの友人・知人の名前が出てくるのですが、私がチェックした限りでは名前が出てこない。だから彼らも「夢顔さん」である資格があるのではないか。

もっとも近衛文麿の収容所からの手紙は、40数中のうち、27通しか公開されていませんから、この可能性も、あえなく消えるかもしれません。これはやはり、推理小説向きの謎のようです。

歴史的大事件の現代性

こういう謎がいっぱい出てくるのが、ゾルゲ事件・731部隊・シベリア抑留の研究世界です。

こういう事件の現代性といいますか、ある大きな事件は、歴史の記憶の中で絶えず作り変えられ、それで、我々が自分の作った物語で納得するのだけれど、それでは納得できないような証拠・史実が新たに出てくると、別の物語を作らなくてはいけない。これが、戦争の記憶であり、私の言う情報戦です。それが外交の場では、もっと厳しくて、ユネスコの拠出金を出すか出さないかという問題にまで広がってくる。

以上が、今日の私の話でございます。ご清聴ありがとうございました。〔拍手〕

完

〔質疑応答〕

Q： 731をアメリカがどう利用して、またその意思決定にマッカーサーがどう関与したかというところを、ご説明下さい。

A： その関係については、731研究の中では、柏書房から近藤昭二編『731部隊・細菌戦資料集成』として、CD-ROMで8枚、アメリカで集められたすべての731関係の資料を、近藤昭二さんが編集して、1冊5万円のセットで売っております。その中に、私がアメリカに行って、「おっ、これは新しい資料ではないか」と思った731関係のものは、殆んど既に入っていました。米軍調査団の報告書、石井四郎の尋問記録その他です。

実は、NHKなどで、731部隊は、いくつかテレビドキュメントになっています。それが今日では、YouTubeで簡単に見ることができます。ユーチューブに「731」と入れると大体50本ぐらい出てきます〔笑〕。日本だけではなくて、中国が作った映画、ロシアが作ったテレビ映画、英語やドイツ語のドキュメンタリーものもあります。それで「731」研究の到達点は、映像でも知ることができます。

今のご質問に答えれば、はっきりしないのは、アメリカは朝鮮戦争でもベトナム戦争でも、確実に細菌戦の基礎研究に基づく何らかの生物化学兵器を使った筈だけれども、しかしそれらが、石井四郎ら日本の731部隊の提供したデータによるという因果関係は、なかなか証明できない。つまり、アメリカでもドイツでも、戦時中から生物兵器の基礎研究はやられていましたから、それらの全成果の上に作られています。

現在の中東で使われているさまざまな爆弾にまで問題が広がることは分かっていますが、それを公文書で、歴史的因果関係として証明するのは難しい。しかし推定は可能である。そういう段階です。

731部隊の調査・免責に、直接にはマッカーサーは関係していません。G2のウィロビーは、確実に関わっています。

この点で、一つだけ質問に付け加えたいと思います。実はマッカーサーは知らないけれども、GHQ・PHW のサムス准将の役割が要注意です。つまり、占領軍の公衆衛生福祉局、Public Health and Welfare Section（PHW）と言いますが、この部門が、二木秀雄その他731医学関係者がGHQに食い込む入り口の一つです。そのもとは、戦後すぐ占領にやってきた日本は、伝染病が蔓延し、 結核も死亡率一位で、不衛生な国でした。米軍は、何も日本人の健康のためにPHWを置いたわけではない。占領する米軍兵士を守るためには、まずは日本人の伝染病・感染症を退治しなくちゃいけない。それで、DDT革命をやりまして、蚊をなくし、結核の予防接種、赤痢その他を日本からなくす衛生政策を実行していく。

サムス准将は、米軍軍医の最高位にある人ですが、このサムス准将がやったことは、確かに生活保護をつくるとか、医療制度を改革するとか、民主化もいっぱいやっていて、今日の医学関係の研究では、「医療民主化の父」「日本の福祉の父」と、高く評価されています。

しかしサムスのやったことは、米軍兵士の健康を守るために、伝染病をなくさなければいけない。そのために、日本の病気に詳しい医学者・医師の専門家の力を借りなくて

はいけない。それで、当時の日本医学の最先端だった元731部隊の医師たちが、動員されるのです。東大の伝染病研究所がポイントで、そこからワクチンを作る予防衛生研究所が分かれ、現在の国立感染症研究所になっていくわけです。

広島・長崎の原爆被害調査、ABCC 調査団も、サムス准将の指揮下にありました。これもアメリカ人軍医だけで、調べるわけにはいきません。日本人の医師・医学者の中でも最も優秀な人たちが、広島、長崎の現地調査に連れて行かれるのです。

この中に、731部隊関係者が多数含まれているのです。この人たちが、PHWの指導する厚生省のさまざまな委員になり、その後の日本の医学界で偉くなっていくという関係です。マッカーサーよりは、PHWのサムス准将が、重要な役割を果たしている。

ついでに言えば、サムス准将は、朝鮮戦争が始まったときに、朝鮮半島でソ連が細菌戦をやっているのではないかというので、すぐにマッカーサーの命令で、朝鮮に出かけます。ただし「それは細菌戦ではなく、普通の伝染病だ」という報告をまとめる。

サムス准将というのは、竹前栄治さんが自伝を訳しています[3]竹前さんはどちらかというと好意的に書いているのですが、実は、いろいろ調べると問題がある軍人です。

ちょうどCISのポール・ラッシュが、もともと聖公会の神父として日本にやってきて、占領期には軍人として戦犯名簿を作ったりするのと同じで、あくまでも彼は、軍医として優秀であり、アメリカ軍の兵士の健康を守るために、しょうがないから軍務として日本人にも健康を与えたのですね〔笑〕。

こういう関係を見ておくことが重要なのではないかということです。時間が過ぎましたので、一応これでお終いとします。〔拍手〕

了

[3] 『GHQサムス准将の改革―戦後日本の医療福祉政策の原点』単行本 - 2007/11、クロフォード・F. サムス (著), Crawford F. Sams (原著), 竹前栄治 (翻訳)、桐書店。